

平成 19 年度提出卒業論文
「沖縄移住ブーム」の成り立ちと現状
—石垣島を事例として—
西村 翠 (A04LA074)

【目次】

- I はじめに
 - II 沖縄イメージの形成・分化
 - 1) 沖縄イメージの形成
 - 2) 沖縄イメージの分化
 - III 沖縄の観光発展と移住
 - 1) 沖縄観光の歴史
 - 2) 沖縄観光の変容
 - IV 石垣島における移住の現状と聞き取り調査
 - 1) 石垣島の移住の歴史
 - 2) 石垣島の移住の現状
 - 3) 石垣島移住者に対する聞き取り調査
 - V 移住ビジネス
 - 1) 書籍による移住紹介
 - 2) 移住仲介業者・不動産業者
 - VI おわりに
- 注
参考文献
参考 URL

【キーワード】

海洋博 沖縄イメージ 観光 石垣島 移住ビジネス

I はじめに

近年、日本本土から沖縄への移住者や長期滞在者が増加しており、「移住ブーム」としてテレビ番組や雑誌など多くのメディアでとりあげられている。しかしながら、近年の移住者の中には住民票を移すことなく移住してくる「幽霊人口」が相当数存在していると予想されるため、移住者の動向について正確に鳥瞰できるデータは存在しない¹⁾。

参考までに沖縄県における県外転入・転出・転入出超過数の推移（図1）をみてみると、1998年に転入超過に転じて以降、2001年には転入超過数が一度は激減するものの、その後は転入超過数が急激に伸びている。また、他都道府県からの転入者数の伸び率の推移（図2）をみても、2005年には全都道府県の中で最も高い伸び率となっており、沖縄県全体として転入者が2000年前後から急増しているということがわかる。近年の移住の傾向としては中高年の早期退職者や定年退職者が多いことにある。近年、団塊の世代が定年退職をむかえるにあたって社会のさまざまな面で影響や問題が発生しているが、移住についても例外ではない。定年後、沖縄で永住もしくは長期滞在をしようと考える人がこれからさらに増加することが予想される。

では、なぜ多くの人々が沖縄を移住先として選択し、「移住ブーム」とよばれるほどにまでなったのか。その理由の一つとして挙げられるのが、テレビや映画などのメディアを通して浸透していった「沖縄イメージ」である。個々人によって沖縄に対するイメージに多少の差異はあるとしても、「青い海」や「独特の文化」といったイメージを持っている人が大多数であるだろう。そこで「沖縄イメージ」がどのように形成され、人々の意識の中に浸透していったのかということについて検討する。また、沖縄には1972年の本土復帰後、沖縄国際海洋博覧会を経て観光発展してきた経緯があることから、本論では沖縄の観光に関する過去の調査結果や統計資料から沖縄の観光の変遷と近年の移住増加の関連性についても論じていく。

ここでひとつ留意しておかなければならないのは「沖縄」ということばはあくまでも総称であるということだ。「沖縄」と一口にいっても、本島だけでなく、宮古諸島や八重山諸島といった先島諸島やその他多くの島々が存在しており、それぞれの地域には独自の文化や風習が存在にしている。しかし、これまでの沖縄に関するイメージや観光に関する研究では離島は「沖縄」に含まれた状態で未分化のまま扱われることが多かった。そこで本論ではひとくくりに「沖縄」として論じるのではなく、本島や離島を分けてとりあげ、それぞれにおけるイメージ形成や観光発展にはどのような違いがあるのかを論じていく。

1) 八重山毎日新聞 2006年7月27日付の「幽霊人口5000人？」という記事による。

一部の新聞等の報道によると石垣島だけでも5千人を優に超えるのではないかといわれるほどで、納税の義務を果たさないため市の財政が圧迫されるなどの問題を誘発している。

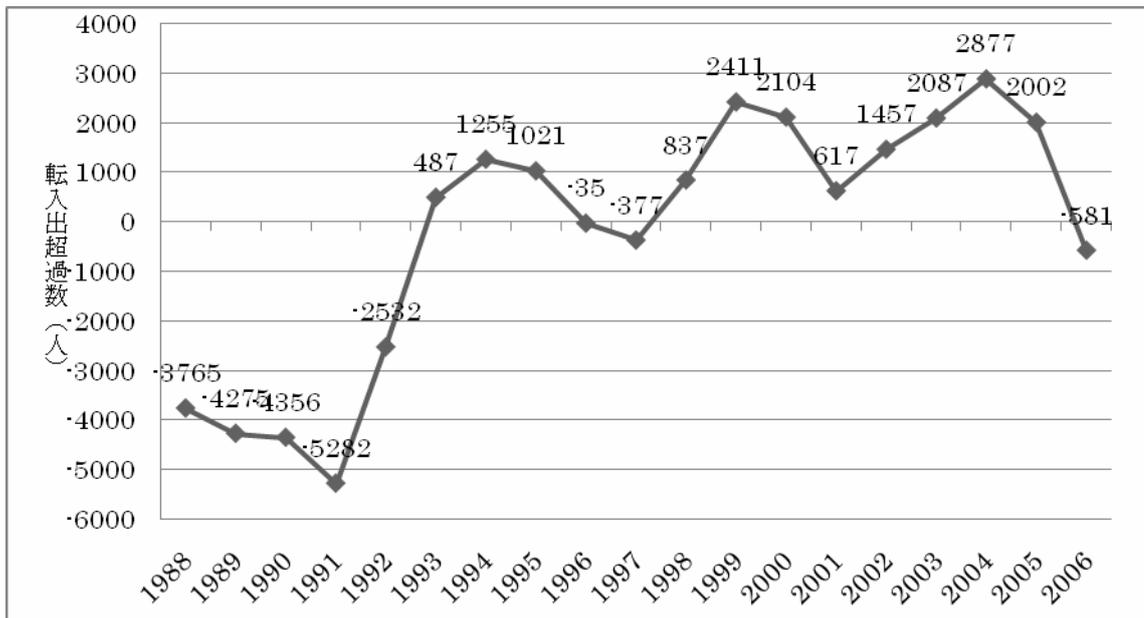


図1 沖縄県における転出入超過数の推移

総務省「住民基本台帳人口移動報告」をもとに作成

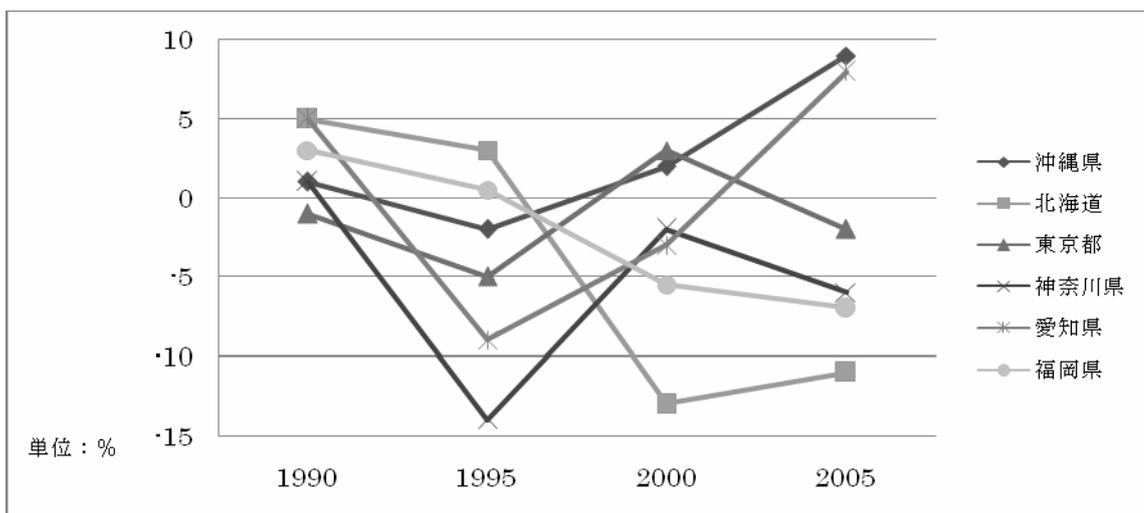


図2 他府県からの転入者数の伸び率の推移

総務省「住民基本台帳人口移動報告」をもとに作成

II 沖縄イメージの形成・分化

1) 沖縄イメージの形成

「沖縄」といえば、どのようなことをイメージするか。青い海などに代表されるような沖縄の自然の美しさやあたたかい亜熱帯の気候であったり、あるいはゴーヤーや豚の角煮などの健康食や三線を奏でる沖縄音楽などの沖縄独特の文化であったりするかもしれない。上に挙げたような沖縄イメージはテレビや雑誌などのメディアで頻繁に登場している。この章ではまず、沖縄イメージがどのようにして形成されていったのかを本章ではみていくことにする。

沖縄イメージについて研究した多田の著書『沖縄イメージの誕生—青い海のカルチュラル・スタディーズ』によると、今日広く一般的にいわれる沖縄イメージの原点は沖縄海洋博であるという。そこで、沖縄海洋博を通して沖縄イメージがどのように形成されていったのかをみていく。

多田（2004）によると、本土復帰前から本土のゼネコンが入域してきていたが、本土復帰以降、それまではアメリカの統治下にあった沖縄に高度経済成長期に本土で実践されていた「開発」が本格的に流れ込んでくる。そんな中、東京オリンピックや大阪での万国博覧会に続く形で沖縄海洋博の開催が決定する。大きなイベント開催に伴い、インフラ整備がいつせいに進められることによって、巨額の経済効果をあげ、大規模な観光開発をすすめることを狙った。

沖縄海洋博において沖縄の地理的・自然的条件は積極的に手を加えられ、「沖縄らしさ」を表現するものとしてディスプレイされた。そのことから現在われわれが沖縄といわれてイメージするステレオタイプの沖縄イメージというのは沖縄のままの自然に基づくイメージではなく、観光開発という名の下に加工された自然に基づくイメージ、つまり、「創り出されたイメージ」と言えるだろう。そして、創り出される沖縄イメージには少なからず本土側が意図する方向へ沖縄を操作していこうとする側面が見出せる。そして、そこには本土と沖縄のあいだの力関係が見えてくる。先にも述べたように、アメリカから本土復帰した沖縄では本土政府が主導して開発が行われていく。野村（2005:163）は本土政府が米軍基地を沖縄に押し付けていることを「植民地主義的搾取」と表現しているが、沖縄における本土政府本位の開発も「植民地主義的搾取」の一部とみなすことができるのではないだろうか。そして、その搾取の中で創り出された沖縄イメージというのは本土側が沖縄に対して求める姿の一方的投影ともいえるのではないだろうか。

さらに、沖縄イメージを普及させる役割を果たしたものとして、雑誌やポスターなどのビジュアル・メディアをあげることができる。多田（2004:30-31）によると、沖縄復帰直後の『anan』（1973年6月5日号）では「海の特集号」として沖縄の特集が組まれている。「亜熱帯の海のリゾート」と称して、エメラルドグリーンの海に水着を着た女性モデルの写真が掲載されている。また、70年代以降航空会社を中心として大規模に行われた「沖縄キャンペーン」における大規模な宣伝活動も同様に視覚的な沖縄イメージを人々に浸透させ、定着させる働きをもっていたと考えられる。以上のことから沖縄イメージの普及・浸透には沖縄の観光発展も大きく影響しているといえるだろう。

2) 沖縄イメージの分化

これまでは海洋博をきっかけとしてどのようにして沖縄イメージが誕生したのかということについて述べてきたが、最初にも述べたように、「沖縄」というのはあくまでも総称であって、その言葉1つで沖縄をすべて形容できるというものではない。しかし、多田（2004）は沖縄本島におけるイメージとその他の離島におけるイメージを区別することなく論じている。未分化な状態のまま沖縄全体をトータルした漠然とした「沖縄イメージ」から本島や離島といったような具体的な地域に対してのイメージへとどのように分化していったと考えられるか。本論では主に沖縄の離島を人々に意識させる役割を果たした要因と思われるものを見ていくこととする。

(a) 海洋博から離島ブームへ

まずは、沖縄イメージを誕生させた沖縄海洋博にまでさかのぼって、その中で離島はどのような役割を果たしていたのかを考える。沖縄海洋博のメイン会場は沖縄本島の北部および本部半島であり、離島は本島に比べるとインフラ整備も遅れをとっており、航空輸送に関しては本土からの直通便も当時はまだ運航していなかった。しかし、離島にも海洋博関連施設が建設され、離島における関連施設は海洋博のテーマを沖縄全域に広めることを狙いとしていた。それと同時に各地域を空間的に個別化するのはたらしきをそれぞれの海洋関連施設は果たしていた（多田 2004:87）。このように、海洋関連施設を通して海洋博のテーマを各地域で共有すると同時に一方では個別化され、沖縄には本島以外にもさまざまな離島が存在しているということを多くの観光客に対して認識させた。ただし、この時点では沖縄イメージの分化がおこったとはいえないだろう。

具体的に離島へ人々の関心が向けられ始めたのは海洋博以降の観光ブームである。日経テレコン 21²⁾において、「離島観光」をキーワードにして新聞記事検索をしたところ（表1）、1982年5月17日付けの日経産業新聞で「東亜国内航空福岡、離島観光キャンペーン『沖永良部島』のスタート好調」という見出しの記事をみつけることができた。このことからわかるように、少なくとも1980年代の初めには「離島観光」に対する関心が広がっていたということになる。また、航空会社などの観光産業に携わる会社は離島への観光に目を向け、ツアーやキャンペーンを企画した。第Ⅲ章でもとりあげるが、この時期沖縄は国内の新婚旅行先としても注目されており、沖縄の離島も新婚旅行のコースの一部に含まれていることが多かった。以上をふまえると、こうしたツアーやキャンペーンのPR活動を通じて沖縄の離島に対するイメージが少しずつ他の沖縄の地域とは分化された形で形成されていったのではないかと考えられる。

2) 日経テレコン 21 では日経四紙をはじめとして一般紙、業界専門紙など 60 紙以上の新聞記事、日経BP社などが発行する 60 誌以上の雑誌記事を、過去にさかのぼって自由なキーワードで検索することが可能である。

表1 日経テレコン 21 記事検索結果 キーワード：「離島観光」

日付	見出し	媒体
1981/04/10	南西諸島自立への胎動（7）離島観光の小浜島―農漁業と共存共益	日本経済新聞
1982/05/17	東亜国内航空福岡、離島観光キャンペーン「沖永良部島」のスタート好調	日経産業新聞
1982/05/21	交通公社、熟年向け「沖縄」を開拓―まず滞在型、オフにも的	日経産業新聞
1982/07/19	南下する“離島観光前線”―沖縄本島から八重山へ、レジャー施設が続々	日本経済新聞
1982/07/28	曇りがちのハワイ観光（下）転機に立つツアー、離島を日本旅行客に PR	日経産業新聞
1982/08/03	日航、ハワイ州政府と共同で観光キャンペーン―ハネムーンイメージを打破	日経産業新聞
1983/01/12	57 年度上記中の道内観光客数、前年同期比 5.1%増と過去最高―道まとめ	日本経済新聞
1983/03/04	内外航空、鹿児島島の離島路線準定期便の運行を今月限りで休止	日本経済新聞
1983/06/08	57 年度の九州の主要離島航路、輸送実績は前年度比減少―海運局まとめ	日本経済新聞
1983/12/04	奄美戦争、有権者ゆるがず―田中派の壁にせまる（選択の風土 83 総選挙）	日本経済新聞
1984/07/29	曲がり角の観光九州最前線（7）離島の小さな実験―宝探しで名所売る	日本経済新聞
1986/05/20	ながもり観光、離島ブームの利尻に国際観光ホテル	日経産業新聞
1987/04/04	石垣島のホテル・ゴルフ場、全日空が買収へ―離島観光の拠点作り狙う	日本経済新聞
1987/04/08	石垣島のホテル買収、全日空、離島観光の拠点に	日経産業新聞
1987/08/02	観光客呼ぶ島おこし―海外の振興策に学ぶ、英国・イタリア・ギリシャ（断面 87）	日本経済新聞
1987/08/18	夏の観光ヒット商品診断（10）天売・焼尻―知名度向上に全力、国定公園めざす	日本経済新聞
1987/08/22	沖縄県（2）青い海に生きる観光・沖縄（産業人国記）	日経産業新聞
1988/03/09	本四連絡橋検証（10）観光や物流の整備進む広島（せとうち経済圏新時代）	日本経済新聞
1988/10/05	鹿児島商船、来夏から一種子島・屋久島へ、超高速艇が就航	日本経済新聞
1989/02/16	4 月から、西南航空、団体包括割引を導入	日本経済新聞
1989/04/15	奥尻町―海の幸に付加価値を、離島観光はアクセス課題（都市を支える人と産業）	日本経済新聞
1991/09/17	特集―整備新幹線、課題も乗せ見切り発車、観光客の増加、企業誘致促進	日本経済新聞
1993/02/26	平盛リゾートエンタープライズ、5 ホテルを個性化―競合避け相乗効果	日本経済新聞
1993/07/26	南西沖地震、道内離島観光に打撃―利尻・焼尻、団体キャンセル続出	日本経済新聞
1995/10/07	四国運輸局、離島振興へ調査委―観光開発、旅客を誘致	日本経済新聞
1996/07/02	運輸局と香川県、香川の離島ガイド発行―観光スポットや宿など紹介	日本経済新聞
1998/03/03	道、道北振興へ、広域観光ルート検討	日本経済新聞
1998/07/17	平盛リゾートエンタープライズ社長平良朝敬氏（ベンチャー企業九州を動かす）	日本経済新聞
2001/01/11	佐渡の観光客、9 年連続前年割れ、2000 年、団体客の減少続く	日本経済新聞
2004/01/26	沖縄県、昨年の観光客数 500 万人突破―官民一体で誘致策、テロなどに不安も	日本経済新聞
2004/05/22	離島ツアー、態勢整備が必要（ひとりごと）	日本経済新聞
2005/02/21	沖縄経済特集―沖縄「懸け橋」へ飛躍、観光客、年間 500 万人、離島好調	日本経済新聞
2005/06/28	離島の観光振興へ割安なクルーズ、都など開始	日本経済新聞
2006/02/11	第 6 部離島ルネサンス（4）鹿児島・奄美―クルーズ船、島唄で呼ぶ（海のちから）	日本経済新聞

(b) 『ちゅらさん』効果

さらに、沖縄の離島のイメージをより視覚的に具体的にしたものとして、映画『ナビィの恋』、テレビドラマ『ちゅらさん』をあげることができる³⁾。特に『ちゅらさん』は長期間にわたって放送されており、またテレビ放送で広く多くの人に視聴されていたため、視聴者に与える影響力は絶大であったと考えることができる。

『ちゅらさん』以前にも沖縄を舞台としたテレビドラマがなかったわけではなかったが、加藤等(2004)は『ちゅらさん』がそれまでの沖縄を舞台とした作品と異なった点はドラマの中で沖縄の日常生活を描いたという点であると指摘している。生産者である製作者スタッフに沖縄出身者がいないことから、「日常の沖縄」は生産者が持っていた沖縄に対するステレオタイプから作り出された(加藤等2004:30)ものであり、これを野村(2005:167)は「文化的搾取」と称して問題視しているが、八重山諸島の小浜島を舞台としてオープニングから海や山などその自然の美しさがふんだんに映し出されていることによって沖縄の離島イメージに視覚的具体性をもたらした。

また、『ちゅらさん』において日常生活の場としての沖縄が描かれていることによって、沖縄に対して向けられるまなざしにも変化があったと考えられる。観光地として発展してきた沖縄に「日常生活の場」としての側面があることを印象づけたのである。つまり、『ちゅらさん』のテレビ放映は離島イメージに視覚的具体性をもたせたということだけではなく、視聴者に沖縄での日常生活を意識させる効果を持っている点において、近年の沖縄への移住、特に離島への移住ブームにも大きく影響をあたえたと考えられる。

「大宅壮一文庫雑誌記事検索Web版」⁴⁾ および、「聞蔵Ⅱ」⁵⁾ で「沖縄移住」をキーワードに雑誌や新聞記事の検索を行った(表2-1, 2)。「大宅壮一文庫雑誌記事検索」で雑誌記事を検索したところ37件の記事があった。「沖縄移住」に関連する記事として最も古いものは2000年1月の記事で、以降、2004年をピークとして「沖縄移住」の関連記事が掲載され続けている。同じく、「聞蔵Ⅱ」で検索したところ、朝日新聞に掲載された沖縄移住関連記事数は21件であった。もっとも古い記事は1996年のもので、そこから数年間は移住関連の記事は掲載されていないものの、2001年に「沖縄移住」の記事が継続的に掲載されている。雑誌検索・新聞記事検索の結果において「沖縄移住」に関する記事が2004

3) 『ナビィの恋』は1999年公開の中江祐司史の監督作品、沖縄の粟国島が舞台となっている。

『ちゅらさん』は2001年に放映されていた八重山諸島の小浜島を舞台とするNHKの連続ドラマ。平均視聴率26%を超える人気作品で本編放送終了後もパート2, 3, 4と続編が放送された。

4) 大衆娯楽誌、風俗誌の雑誌専門図書館である大宅壮一文庫が所蔵する雑誌のうち、1988年以降、約370タイトルの雑誌記事の検索がウェブ上で行える。

5) 1945年以降の朝日新聞記事及び、84年以降の朝日新聞地方紙の記事、88年以降の『AERA』、2000年以降の『週刊朝日』の記事が検索できる。

年をピークとして、『ちゅらさん』放映の前後から登場したことからしても、『ちゅらさん』が沖縄に対

表 2-1 大宅壮一文庫文庫雑誌記事検索結果 (2007/11/29 日時点) キーワード:「沖縄移住」

日付	見出し	媒体
2000/01	人生をリセットする なぜ、彼らは「沖縄移住」を選択したのか しがらみのない場所へ 沖縄に「自由」はあるか ※どんとと小嶋さちほ夫妻	プレジデント
2000/01	人生をリセットする なぜ、彼らは「沖縄移住」を選択したのか 隠居のはずの土地で見つけた新しい生き甲斐 ※刺青彫師の梵天太郎	プレジデント
2000/01	人生をリセットする なぜ、彼らは「沖縄移住」を選択したのか 故郷を離れ、新天地で新たな人生を歩き出した人々 ※梵天太郎、どんとと小嶋さちほ夫妻	プレジデント
2000/07	沖縄ちゅら見聞録 ※沖縄地理学の父・仲松弥秀が語る沖縄、沖縄移住者たちが語る沖縄の魅力、 沖縄の空路・海路、沖縄の菓子、祭りガイド	ラパン
2000/11	どんとは死なない！ どんとの芸はブーテンさんに近い ※沖縄移住 どんとを取り巻く人々	ミュージック・マガジン
2000/12	【インタビュー】池澤夏樹 NEW TRAVEL WRITING 1994-2000 周縁からの視点を風の島で ※沖縄体験、沖縄移住	Switch
2002/08	ミドルとシニアの自分流 115 回 幼き日の夢「蝶」を追って沖縄移住 3 年間でビデオコンテストに 9 回入賞	週刊読売
2002/11	【インタビュー】GET HAPPY? OKINAWA! 白紙になれる幸せ。内田勘太郎 沖縄移住歴: 8 年 「沖縄にいる時はギターは全然弾かない。」	広告
2002/11	【インタビュー】GET HAPPY? OKINAWA! いちばん近い聖地。宮元亜門 (演出家) 沖縄移住歴: 3 年 「目に見えないものの大きさを沖縄が教えてくれた」	広告
2002/11	【インタビュー】GET HAPPY? OKINAWA! 沖縄移住者 14 人に聞くテゲーのスズメ。 ※作家、キャバクラ嬢、店オーナー、学者、学生、音楽家、イラストレーター、他	広告
2003/11	平成のサラリーマン・ドリーマー50 人 自由ライフ型 組織の価値観にとらわれず自分流を貫く 5 人 ※アクターズスクール開業の早川寿弥、沖縄移住の平井弘大氏、他	THE21
2004/02	借りる? 買う? 建てる? 南の島の物件ガイド。オキナワ住宅情報。 ※実際に沖縄移住した人に聞く、物件ガイド 22、建築事務所、ショップガイド、移住成功の秘訣他	GQ Japan
2004/08	沖縄ダークサイド 逆説の沖縄 沖縄移住ブームにモノ申す! はっきり言おう、「迷惑だから、勝手な幻想持って来るな!」※現地人とのトラブル、軋轢など	別冊宝島 Real
2004/08	沖縄ダークサイド 逆説の沖縄 ※逆説の在沖米軍基地論、辺野古沖ヘリポート建設反対運動、沖縄移住ブームへの警鐘、自殺の急増、他	別冊宝島 Real
2004/08	男のセカンドライフ研究 第 2 弾 宮古島楽園生活 大ブーム! 沖縄移住者が注目	週刊ポスト
2004/09	憧れのストレスフリー生活 働き盛り世代の沖縄移住ガイド ※沖縄にハマった移住者たち、那覇近郊スポット、本場で習う沖縄文化	アサヒ芸能エンタメ
2004/09	沖縄ブームの現実 なぜ沖縄か その包容力に甘えるヤマトンチュ	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄ブームの現実 大陸と沖縄 できるか新「華南経済圏」	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄移住ブームの現実 基地と沖縄 脱「基地依存」を左右する普天間問題	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄移住ブームの現実 公共投資、基地収入の縮小 本格的観光立県として歩み始める沖縄	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄移住ブームの現実 体験者が語る 非日常空間としての魅力	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄移住ブームの現実 体験者が語る 移住のノウハウ	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄移住ブームの現実 移住の現実 厳しい経済下の生活が待っている	週刊エコノミスト
2004/10	[憧れのストレスフリー生活] 夢の楽園生活を実現する! 誰にも聞けなかった沖縄移住のホント!?	アサヒ芸能エンタメ
2005/07	OKINAWA 沖縄移住を実現した 3 人のスローライフを公開!	an・an
2005/08	オキナワ・ライフ入門	オール読物
2005/09	【インタビュー】いい大人が沖縄移住「アテ外れ」顛末記 岡留安則氏が考える沖縄移住とは	SPA!

2005/09	いい大人が沖縄移住「アテ外れ」顛末記 近年、大ブーム。サラリーマンを辞めてまで決行する人が続出する今、元社員が楽園で遭遇した落とし穴とは	SPA!
2005/10	女の決断 ガレッジセール・ゴリ 「沖縄移住」に水中出産妻猛反発	女性セブン
2006/03	リセット願望 リセットアイランド沖縄 沖縄で新しい人生を踏み出そうと、移住する人々が増えている。そんな沖縄移住リセットに挑み、納得の人生を送る3人の女性・・・	プシコ
2006/03	特集 リセット願望	プシコ
2006/05	東京→那覇 4人家族のお引っ越し拝見 ぼくたち家族の沖縄移住	田舎暮らしの本
2006/08	団塊世代の“沖縄移住”で「第2の人生」支援ビジネスが活況	フォーブス
2006/09	カエルのいともカエル 田崎真也さんのいとも・田崎聡さんが語る「泡盛の世界、最高さあー」	週刊朝日
2006/12	この人たちの一分 山口もえ・IT社長夫妻に危機? 「子づくりと沖縄移住」でケンカ	週刊朝日
2007/01	2007年はこの人に訊け! 新春提言 沖縄「楽園」を求めて移住する本土の若者・リタイア組にうんざり	週刊ポスト

表2-2 聞蔵Ⅱ朝日新聞記事検索結果 (2007/11/29 時点) キーワード：沖縄移住

日付	見出し
1996/06/24	「沖縄の心」北九州で共鳴 初心者も参加し三線クラブ結成
2001/03/09	飯塚未登利さん 目指すは「沖縄のオバァ」
2001/07/08	沖縄大衆食堂 仲村清司+腹ペコチャンプラーズ著
2001/08/04	総合季刊誌「けーし風」が編集陣を一新
2001/12/23	長寿の秘訣学ぶ、お年寄り沖縄移住計画 山岡町、来月視察
2002/01/17	冬だけ沖縄移住案、現地に視察団派遣 山岡町、計13人
2002/08/14	泡盛に酔い、魅力を本に 沖縄移住の田崎聡さん
2002/08/15	ガイドひょうご 展覧会
2004/08/17	50代の転身 蝶を追い(スローな島へ 沖縄移住者たち：1)
2004/08/18	情報発信 悩み溶けた(スローな島へ 沖縄移住者たち：2)
2004/08/19	小さな学校(スローな島へ 沖縄移住者たち：3)
2004/08/20	本当の海(スローな島へ 沖縄移住者たち：4)
2004/08/21	伝統の世界 濃く鮮やかな色(スローな島へ 沖縄移住者たち：5)
2004/08/22	大地の恵み 育てる喜び(スローな島へ 沖縄移住者たち：6)
2005/04/24	(亀和田武さんのマガジンウォッチ) 南の楽園の現実が気になって
2006/03/10	沖縄の変質、見つめながら 雑誌「Wander」を終刊
2006/05/28	(ぶらりネット) オフィスからも楽しめる沖縄
2006/12/28	沖縄、移住ツアー人気 地元側「現実も知って」 希望者「家賃安い」誤解
2007/01/15	(WEST) 台湾華僑、息づく沖縄
2007/04/08	(参院補選沖縄)「沖縄」意識、影響は? 「ナイチャー嫁」対「ウチナー代表」

して「移住」ということを多くの人に意識させるのに影響したといえるのではないだろうか。

Ⅲ 沖縄の観光発展と移住

海洋博の開催を通して、沖縄の自然や文化に対するイメージが形成されたが、一方では沖縄の観光リゾート化が急速的に進行していった。海洋博後、一時的に入域観光客数は減少したもののその後は持ちなおし、沖縄を訪れる観光客数は増加の一途をたどり、2005年には550万人にものぼった。(図3) 沖縄海洋博以降このように沖縄が観光の分野において発展していった経緯について確認し、沖縄の観光発展と昨今の移住ブームとの関連性について検討したい。

1) 沖縄観光の歴史

沖縄復帰以前の沖縄観光といえば、南部の戦跡めぐりが中心であった(沖縄タイムス社 198:353)。その後、72年に沖縄が本土復帰を果たすと、44万人もの人が沖縄を訪れている。それまではパスポートなしには渡航できなかったのが復帰を果たしたことでそれまでよりも気軽に沖縄を訪れることが可能になったことや本土復帰を果たした沖縄に対する関心が影響しているのではないだろうか。さらに、沖縄の観光発展を後押ししたのが海洋博であった。本土復帰で倍増した観光客数はさらに、沖縄海洋博が開催された75年には前年の約2倍の156万人にまで達した(図3)。

海洋博でいっきに150万人以上の入域観光客数を呼び込んだ沖縄であるが、海洋博の翌年の76年には反動が訪れ、観光客数は半減し、同じく観光収入も半減している。また、宿泊施設の稼働率も落ち込み、企業の倒産や失業が増加した。しかし、76年の観光客数の激減以降はまた急激に観光客数を伸ばしていく。77年は前年に比べると1.5倍に増えており、79年にかけて順調に入域観光客数を増やしていく(図3)。

こうした海洋博後の急激な観光客数の増加に大きく影響を与えているのが航空会社と旅行代理店を中心に行われ始めた大規模な沖縄キャンペーンである。全日空沖縄キャンペーンはポスターなどを用いて大々的に宣伝された。宣伝ポスターなど視覚的効果が強い媒体を通して人々の意識の中に沖縄に対するイメージが入り込んできているために、人々の意識の中に沖縄イメージが浸透していく過程で強い影響をもったと考えられる。

沖縄キャンペーンの開始以降、沖縄を訪れる観光客の数は200万人に迫るところまで増加をしたが、その後1986年ぐらいまでは軒並み200万人前後の横ばいの時代が続いた。またこの時期、第Ⅱ章でもとりあげたように、離島観光がブームを迎えていた。離島観光の主な客層は、大学生や新婚カップルといった比較的若い世代であった。日本経済新聞(1982年3月15日付)には新婚旅行先として国内では沖縄が人気であるという記事が掲載されている(資料1)。この記事からも、当時、本島だけではなく

離島にも観光のまなざしが向けられていたということがわかる。

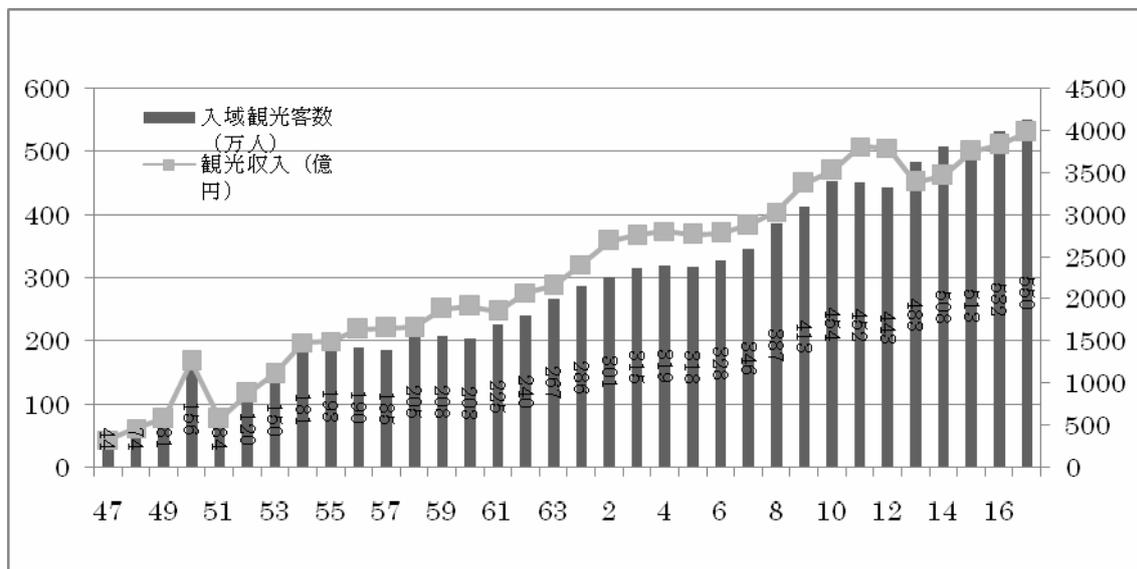


図3 沖縄観光の歴史

観光要覧をもとに作成

資料1 「春の新婚旅行人気コース、海外はハワイ、国内なら沖縄—交通公社まとめ」

(日本経済新聞 1982/03/15 付記事)

春の結婚シーズンを前に、日本交通公社がこのほど今春（三—五月）の新婚旅行の傾向をまとめた。それによると、海外旅行組が五七・三％、国内旅行組が四二・七％と相変わらず海外組が上回っている。海外、国内とも「離島ブーム」が続いている。カップルの平均費用は海外組約七十一万円、国内組は約二十九万円だった。

この調査は交通公社が東京、大阪、名古屋にある同社九支店に申し込んだ約三千組を対象に行った。

海外の行き先ではハワイが四十九年以来九年連続でトップ。しかし、ひところのように過半数を占めるには至らず、三九・八％と四割を割り込んでいる。本当から周辺のカウアイ島、マウイ島などを訪れる組が増えているのが特徴という。

二位は一五・七％のグアム・サイパン。次いで欧州（一四・五％）、北米（一三・七％）などの順。

一方、中国も伸びている。昨年までは一週間以上のツアーしかなかったのが、今年から五日間コースもでき、行きやすくなったためとみられ、中でも桂林へ行くカップルが多い。

国内の行き先トップは沖縄・与論島で、五年連続。全体の四〇・八％を占め、二位の北海道（二二・〇％）、三位の南九州・奄美大島（一五・九％）を大きく引き離している。約三分の二のカップルは沖縄本島から石垣島、竹富島など小島を訪れる。特に今年是小浜島の人気が急上昇しているという。

北海道の人気も安定しているのに対し、かつてのメッカ、南九州は昨春より三・三ポイント減少、地盤沈下が続いている。

その後、本格的なリゾートホテルタイプの宿泊施設および沖縄への航空座席の増大に伴って再び順調に観光客数を伸ばしていったが、観光客数は1990年から再び増加率が落ち込み、再び停滞期を迎えた。この停滞には沖縄観光にとってはライバルとなる海外旅行の旅行料金の低廉化が大きく関わっているものと考えられ、1995年、96年あたりから沖縄路線の航空運賃の低廉化が図られた。また同じ時期にはパックスツアーの低価格化が進んだこともあいまって、海外旅行との価格競争力もついて、再び沖縄への観光客数も増加に転じていった(岩佐 2007:101-102)。2001年の9・11同時多発テロの影響により、沖縄の観光産業は大打撃を受けたものの、同年放送された『ちゅらさん』によって、沖縄人気が一気に過熱し、それ以降、観光客数は順調に増加の一途をたどっている。さらに、観光の発展のもとで、第II章でも述べたように、移住に対しても人々の興味や関心が向けられるようになっていった。

2) 沖縄観光の変容

(a) 本島から離島へ

沖縄を訪れる観光客の観光行動を歴史的にみると、沖縄本島での行動が中心であったことがわかる。宿泊施設の動向(図4)についてみてみると、昭和50年代は那覇を中心とした本島南部が県全体の56%と過半数以上を占めていた。しかし、昭和60年代に入ってリゾート法が成立してからは、本島北部の恩納海岸や離島地域で本格的なリゾートホテルの形態をとった施設が数多くオープンしてきたため、離島圏へ宿泊施設の整備が拡大し、平成8(1996)年以降は県全体の約3割を離島圏が占めるようになった(岩佐 2007:99-100)。このことから、もともとは沖縄本島をメインとして沖縄観光が発達してきたが、観光客や観光産業関係者の視線が少しずつ本島だけではなく、離島にも向けられていったことがうかがえる。そこにはどのようなことが影響しているのだろうか。もちろん、テレビや雑誌などのメディアによって離島が取り上げられることが増えたことも一つの要因になるのかもしれない。さらにもう一つの要因としてここで取り上げるのは「リピーター」の増加である。

図5は沖縄観光のビギナー・リピーター比率の推移を表している。それによると、昭和58(1983)年には全沖縄観光客のうち約80%はビギナーであったが、その後は年を経るにつれて徐々に減少に転じ、平成17(2005)年にはついにリピーターの比率が逆転している。

このようにリピーターが著しく増加してきたことは旅行形態の変化にも影響しているものと考えられる。かつては団体旅行が主流であったが、近年では個人旅行が主流になっている(岩佐 2007:103)。個人旅行では、自分で行きたいところを選択しできるため、リピーターは訪れたことのあるところだけでなく、それ以外の地域にも興味を持ち、実際に訪れる。第IV章で扱う聞き取り調査の対象者にも、最初は本島を訪れていたが、後に離島観光するようになったということ話を話した人がいた。このことから沖縄本島を中心として発展してきた沖縄観光から離島観光への分化にはリピーターの増加が重要な役割を果たしているといえるであろう。さらに、リピーターの中には長期滞在を志向する者も多く(図6)、リピーターから発展して長期滞在、ひいては移住へと発展していくケースも少なくないものと考えられる。それまではあくまでも「観光地」であった沖縄が「移住対象地」としての側面も持つように

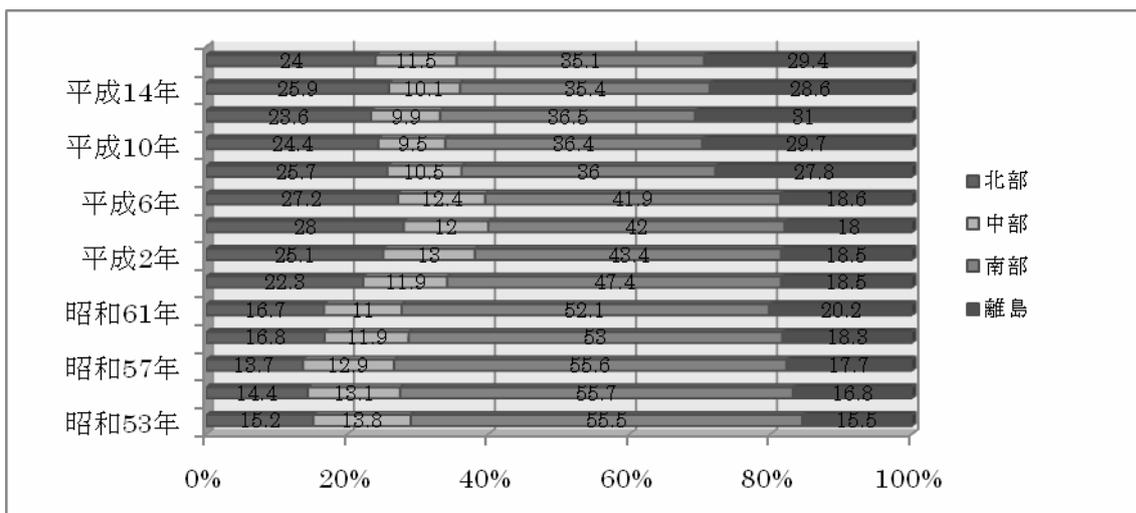


図4 宿泊収容力の地域別構成の変化

「沖縄にける観光業地域の発展」岩佐吉郎 地理 (52-11) p100 をもとに作成

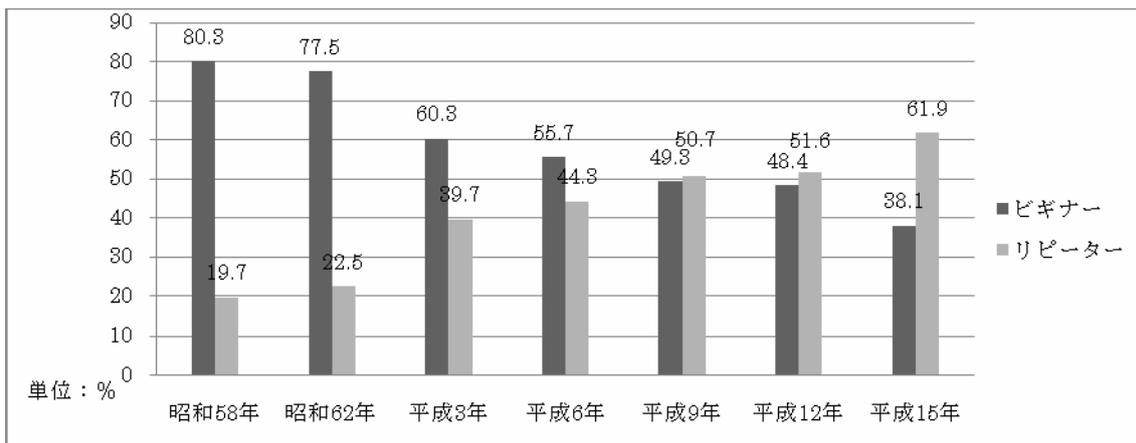


図5 沖縄観光のビギナー・リピーター率の推移

観光要覧 (2005) をもとに作成

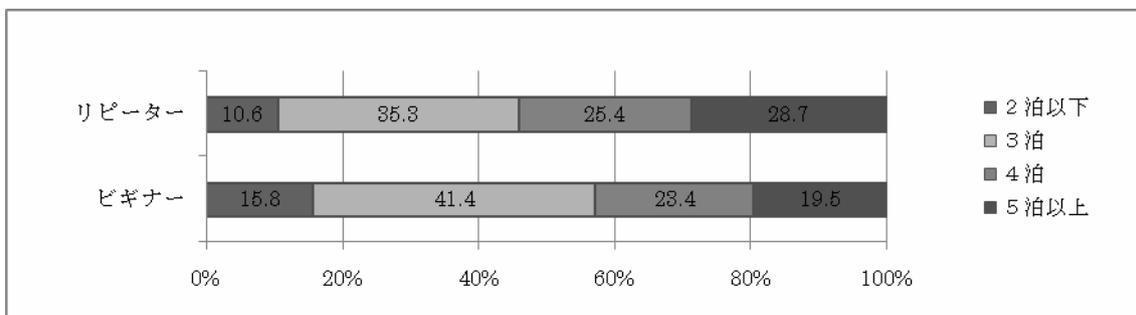


図6 沖縄希望滞在泊数

(財) 沖縄コンベンションビューロー「沖縄観光マーケティング調査」(2000) をもとに作成

なるのではないだろうか。

IV 石垣島における移住の現状と聞き取り調査

第III章で述べたように、沖縄は本土復帰以降、観光立県として発展し、今日に至るまで年々多くの観光客を沖縄に呼び寄せた。近年では沖縄を訪れる人の内訳をみると、ビギナーよりリピーターの割合の方が高くなるほど、沖縄は国内観光の定番になったのである。そして、リピーター比率の増加は沖縄への移住・定住志向を生み出し、近年の沖縄移住ブームにも影響を与えている。

続いて本章では具体的に沖縄県石垣島について取り上げる。近年の沖縄ブームにおいて、石垣島は移住先として大きな人気を誇っている。聞き取り調査の結果等をもとにして人々が移住先として離島を選択していくことにはどのような要因があるのかということについて検討していきたいと思う。

1) 石垣島の移住の歴史

石垣島は八重山諸島に属する島の1つであり、八重山諸島の政治・経済・交通・教育などの中心地となっている。石垣島は沖縄本島、西表島に次いで3番目に大きな島で、島の中央には沖縄最高峰の於茂登岳(526m)がそびえ、山岳部には亜熱帯の樹木が、平野部にはさとうきび畑や牧草地が広がっている。その一方、川平湾などの海の美しさも多くの観光客を魅了する。

石垣島の歴史についてみてみると、石垣島が移民・移住を何度も受け入れてきた島であるということがわかる。以下、朝田(2002)の論文に基づいて石垣島の移住の歴史についてみていくこととする。

琉球王府の頃から石垣島への移住は行われていたが、この頃の移住は食糧増産や人口調整を目的として、既存集落から当時は未開拓である土地が多かった西表島や石垣島の原野への強制移住であった。明治期以降は本土の人々による開拓が行われはじめ、昭和初期には台湾人の入植が始まり、水牛やパイン栽培を導入させた。現在も台湾系の人々は帰化した人も含めて石垣島に600人ほど居住している。さらに、戦後の開拓は、原則的に行政の援助を受けず、主として宮古諸島から個人的なネットワークを通じて自力で移住してきた自由移民と琉球政府が募集を行い、政府の計画に基づいて入植した政府計画移民にわけることができる。政府計画移民の出身地域としては、宮古諸島が全体の約3割と最も多く、本島の北部・中部がそれぞれ全体の4分の1ずつを占めている(朝田 2002:16)。このことからわかるように、当時の石垣島への移住は本土からの移住はほとんどなく、沖縄内部で起こった人口移動という見方もできるだろう。しかも、本島や宮古諸島から石垣島への移住には自由移民も含まれているが、人口増加対策や食糧増産対策といった政治的側面が強い。もちろん、移住当事者にとっては生活のための移住である。

本島や宮古諸島からの人口流入によって石垣島の人口は急増し、1965年には約4万1千人まで増加した。その後一度は人口が減少したが、1980年代には回復し、その後はしばらく横ばいの状態が続い

た。そして 2000 年以降、再び人口が増加し始めているのがわかる。(図 7)。

2) 石垣島の移住の現状

近年の石垣島への移住について沖縄総合事務局総務部調査企画課の「県内移住者に関する基礎調査」をもとにしてもう少し詳しくみていく。ただし、石垣島としての統計データはないため、以降は石垣市の統計データを使用する。石垣市には尖閣諸島も含まれているが、それらの島々はすべて無人島であるため、石垣市の人口データは石垣島の人口データとしてみなしてもほとんど問題はないものとする。

石垣市における 5 年間の転入者と転出者の動向(図 8)をみると、転入者は増加傾向、転出者は減少傾向にあり、石垣市への転入者は 2001 年から 2005 年までの 5 年間で総数 7424 人にのぼる。ただし、先にも述べたように住民票を移さずに移住している人も多いと推測されるので、転入者数の合計はさらに増えるものと考えられる。

沖縄総合事務局総務部調査企画課の石垣市転入者の移住前住所(図 9)によると、東京都、神奈川県、大阪府、埼玉県、福岡県の順で多く、石垣島への移住者には都市出身者、あるいは都市生活経験者が多いことがうかがえる。都市での多忙な会社勤務や都会暮らしから解放され、癒しを求めて沖縄・石垣へ移住しようとする人が多いということを示しているといえるだろう。

転入者が最も多い月は男女ともに 4 月、3 月であるが、企業や官庁等の人事異動に伴う転勤者やその家族が増えることが影響しているものと考えられる。男女別では女性の増加率のほうが高いことから、これまでは男性の単身赴任や移住が多かったのが最近では家族、夫婦同伴、女性単身で転入者が増えてきているということがうかがえる。(表 3)

また、おきぎん経済研究所の『賃料動向ネットワーク調査』(2007 年)によると、貸家新設住宅着工件数(図 10)では石垣市が 1164 件で前年度に比べて 192 件増加している。2003 年から右肩上がりに急増し、県内でも那覇市に次ぐ新設住宅着工件数となっている。アパートの稼働率(図 11)は石垣市と宮古島市がともに 98.6%と県内でも最も高く、那覇新都心の稼働率が低下する中で離島における稼働率が上昇傾向にある。しかし、こうした石垣島における貸家新設住宅着工件数の増加は一方では問題も引き起こしている。移住者増加に伴う土地売買や住宅建築の活発化により、急激な乱開発による自然景観の破壊や、インフラ整備が追いついていないという現状がある。そういった現状を踏まえて石垣市の HP では移住ブームに伴う乱開発に対してクギをさすメッセージを掲載するようになった。また、自然景観に関する問題については移住者間でも関心が高く、景観保全に向けた条例の制定もすすめられている。

3) 石垣島移住者に対する聞き取り調査

(a) 調査方法

先行研究や観光・移住に関する調査結果をもとに近年の「移住ブーム」という現象について検証してきたが、実際本土から石垣島に移住してきた人たち 12 人に対して聞き取り調査を行った。聞き取り結

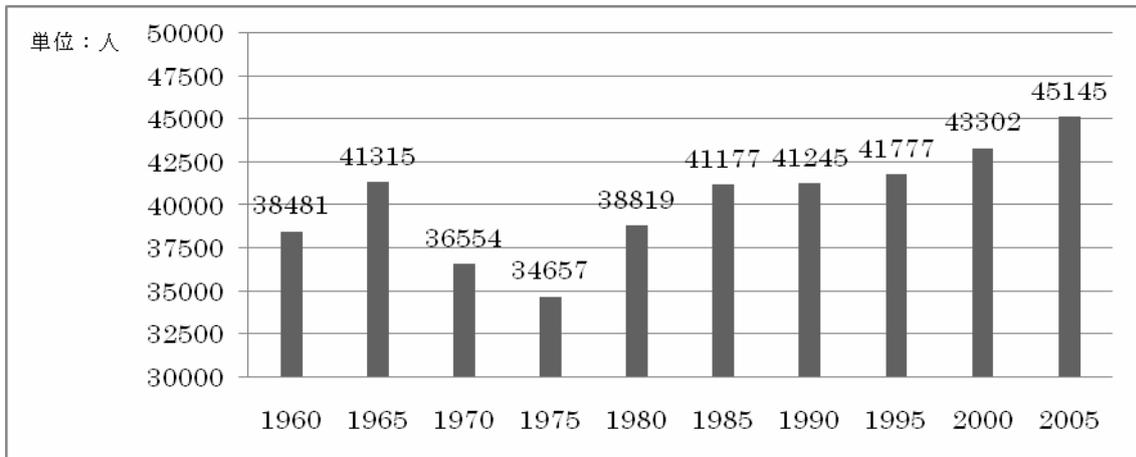


図7 石垣市人口推移

国勢調査（平成17年度）をもとに作成

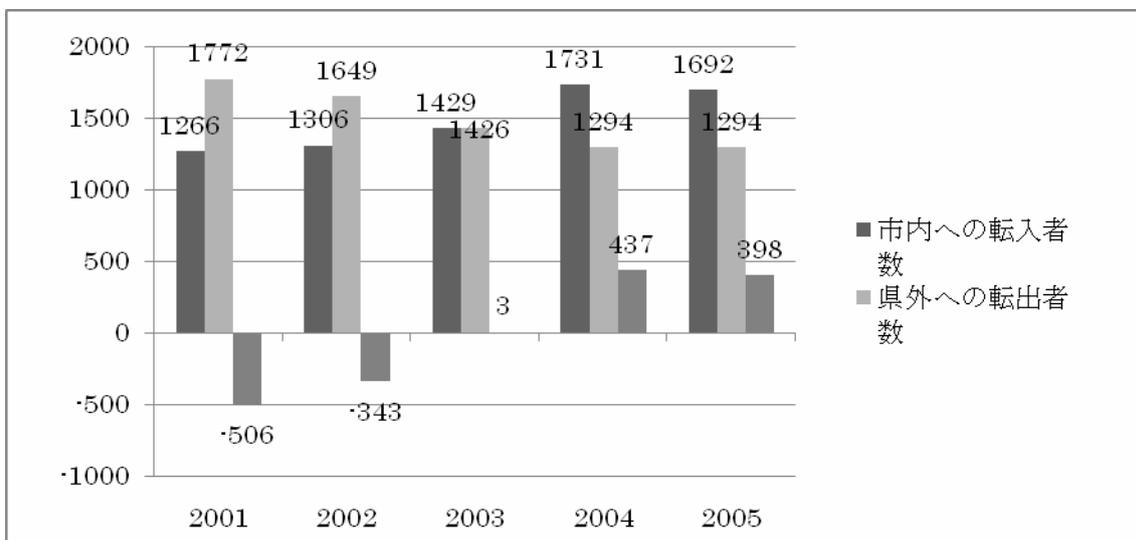


図8 石垣市転出入者の推移

沖縄総合事務局総務部調査企画課「県内移住者に関する基礎調査」（2006）をもとに作成

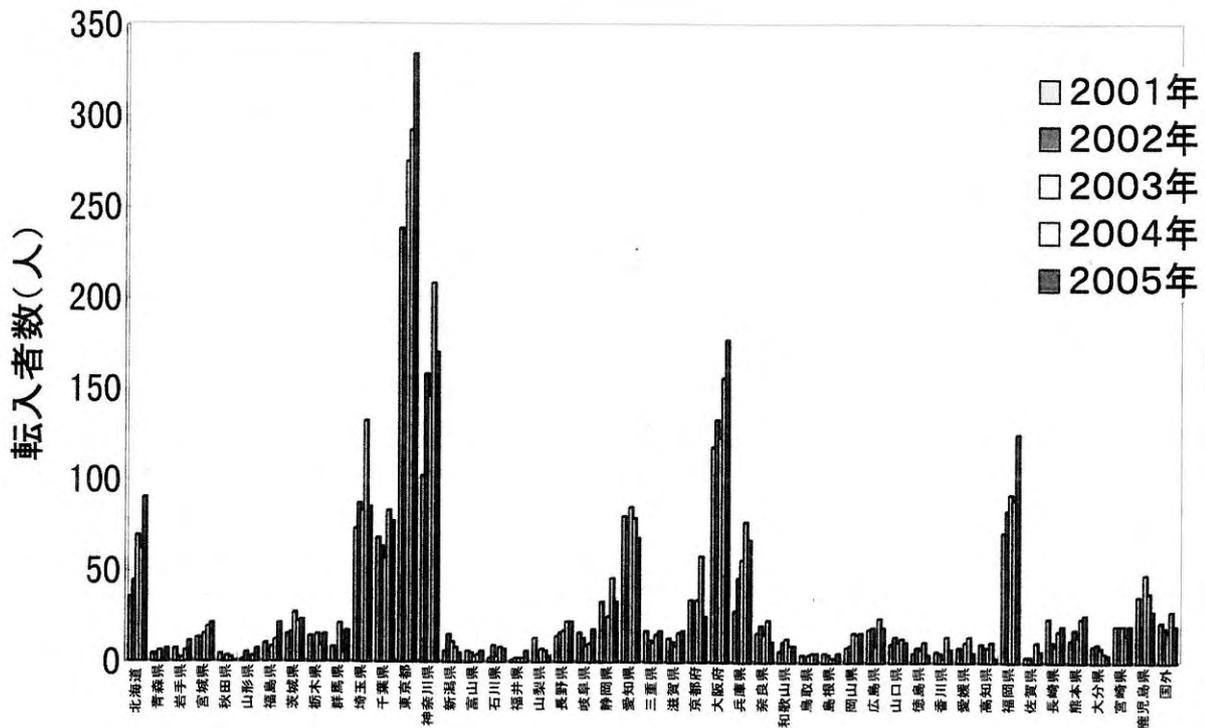


図9 石垣市転入者の移住前住所

沖縄総合事務局総務部調査企画課「県内移住者に関する基礎調査」(2006)より引用

表3 石垣市における月別男女別転入者数の推移

	2001年		2002年		2003年		2004年		2005年		5年間の伸び率	
	男子	女子	男子	女子								
1月	49	45	46	48	31	51	58	69	65	60	133	133
2月	46	25	40	33	46	38	49	60	61	43	133	172
3月	94	87	73	60	77	73	103	118	87	8	93	100
4月	109	94	149	132	144	137	158	132	139	147	128	156
5月	42	59	54	60	52	67	62	74	58	71	138	120
6月	52	50	43	65	54	57	53	80	55	69	106	138
7月	46	56	51	40	53	63	67	87	64	75	139	134
8月	43	45	48	46	46	50	53	52	43	59	100	131
9月	46	37	41	37	41	46	55	65	58	73	126	197
10月	50	51	46	41	63	61	59	56	63	71	126	139
11月	39	34	44	44	42	48	51	54	64	72	164	212
12月	34	33	27	38	45	44	49	67	53	55	156	167
合計	650	616	662	644	694	735	817	914	810	882	125	143

沖縄総合事務局総務部調査企画課「県内移住者に関する基礎調査」(2006)をもとに作成

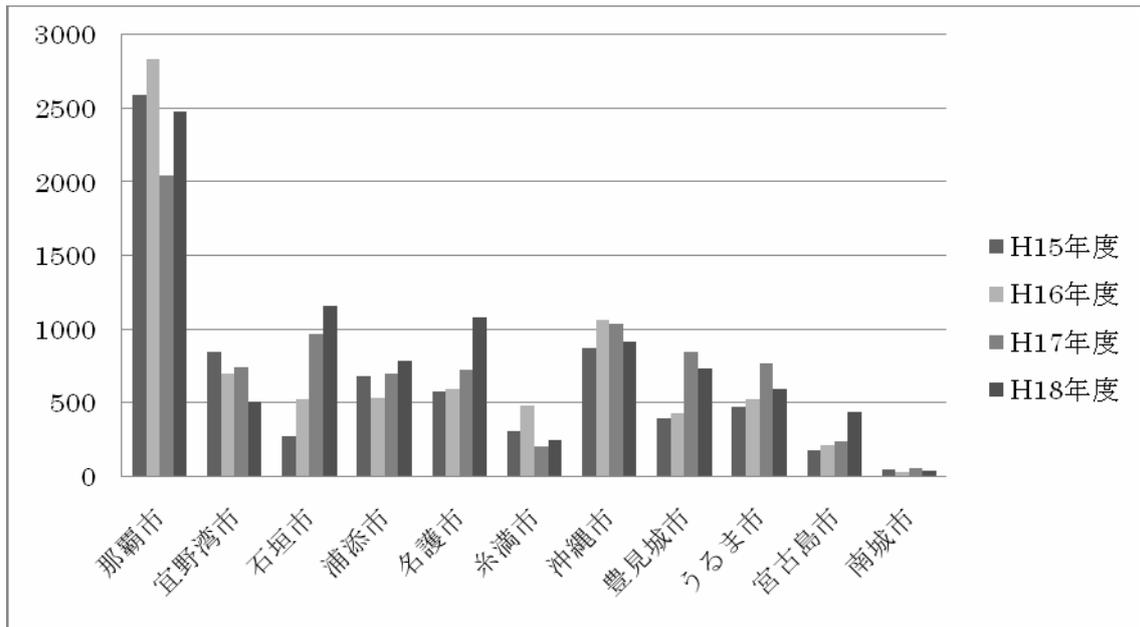


図 10 貸家新設住宅着工数

（株）おきぎん経済研究所「賃料動向ネットワーク調査概要」（2007）をもとに作成

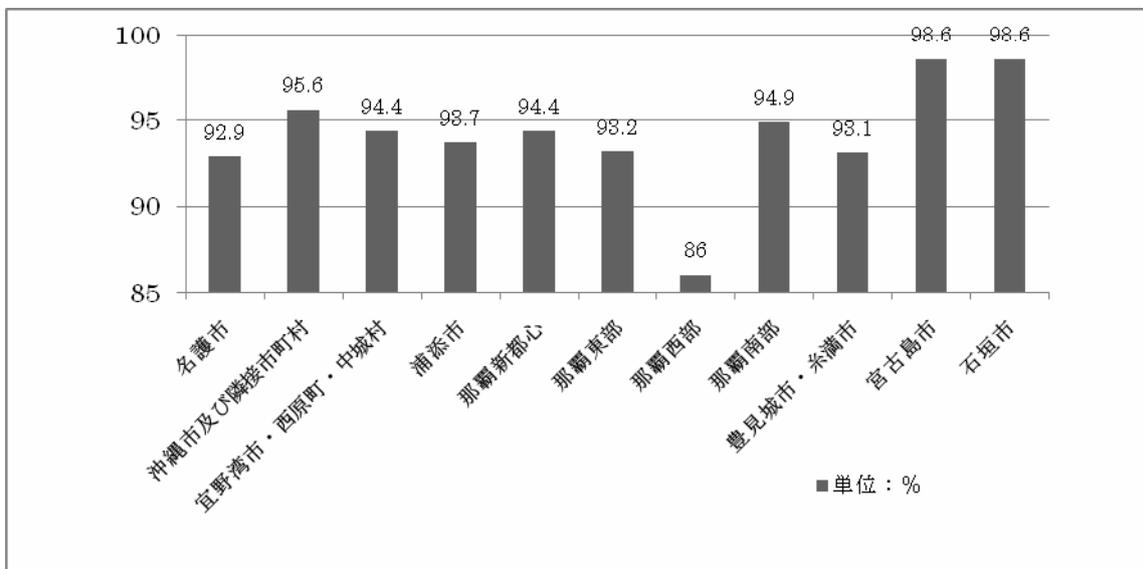


図 11 各地域における稼働率

（株）おきぎん経済研究所「賃料動向ネットワーク調査概要」（2007）をもとに作成

果についてはまとめたものを本論最後に添付する（資料3）。聞き取り対象者については年齢や出身地はさまざまで、居住地も大きく分けると2地域に分かれる。石垣島南部の市街地付近と石垣島北部海岸沿いの川平・吉原地区である。特に吉原地区に関してはもともと農業振興地域であったが、農業振興地指定から外れた土地が宅地分譲されるようになり、近年移住者が多く移り住んだ地域である吉原地区の山原（ヤマバレー）は、そこに在住する30世帯すべてが本土からの移住者で構成されている。なお、聞き取り調査を実施した聞き取り対象者のおおまかな居住地は図12の地図中に記している。

移住に至った経緯、移住する前の沖縄経験や沖縄に対する興味・関心などについて吉原地区や市街地に居住する移住者にそれぞれ質問を行った。聞き取り調査を行った12人のうち、6人（うち1組は夫婦）に対しては電話を通じて再調査を行っている。そのため、本章では電話での調査を行った人と現地での聞き取り調査のみの人とを分けて論じる。1度目の調査では、沖縄に移住するに至った経緯や理由について、具体的で合理的なことについては聞き出すことができたものの、内面的で衝動的な動機についてうまく聞き出すことができなかった。そこで、2度目の調査では相手の話をしている内容だけではなく、話し方や答え方などを通じて移住者の内面的な移住の動機や沖縄（本島・離島）に対する意識についても確認をしている。なお、電話での聞き取り調査に関しては、こちらの質問に対してどのような答えを言ったかということだけではなく、話し方などを含めて、どのような答え方をしたのかを把握するために、聞き取り内容はすべて先方に了承を得た上で音声録音させてもらっている。ちなみに聞き取り内容は資料として本論の最後に添付することとする（資料4）。

以下、現地での聞き取り調査、および電話での聞き取り調査を行った5件を中心に取り上げ、石垣島へ移住しようとする人々が考える動機や経緯について探り、移住先を石垣島へ選択していく過程についてどのような構造が存在するのかということをも明らかにしていく。

(b) 事例①

A夫婦⁶⁾は、夫は40歳代後半、妻は40歳代前半で移住前は横浜で共に広告代理企業に勤務していた。2006年9月に石垣島へ移住してきて、2007年1月から吉原の山原地区で趣味の焼き物をしながら生活している。

夫は仕事の関係で10年以上前から数十回にわたって沖縄本島へ行っている⁷⁾。一方、妻は夫婦で8年前に石垣島へ旅行するまでは沖縄へ行った経験はなく、夫婦間で沖縄経験に大きな差があることがわかる。

6) 1回目の聞き取り調査では夫婦2人から話をうかがい、電話インタビューには妻が答えている。

7) 夫の方は仕事で本島へ行って、仕事仲間とともに「沖縄文化研究会」というのをづくり、沖縄の歴史や文化について調べ、議論をしていたこともあって、沖縄に関する知識はかなりあるようである。

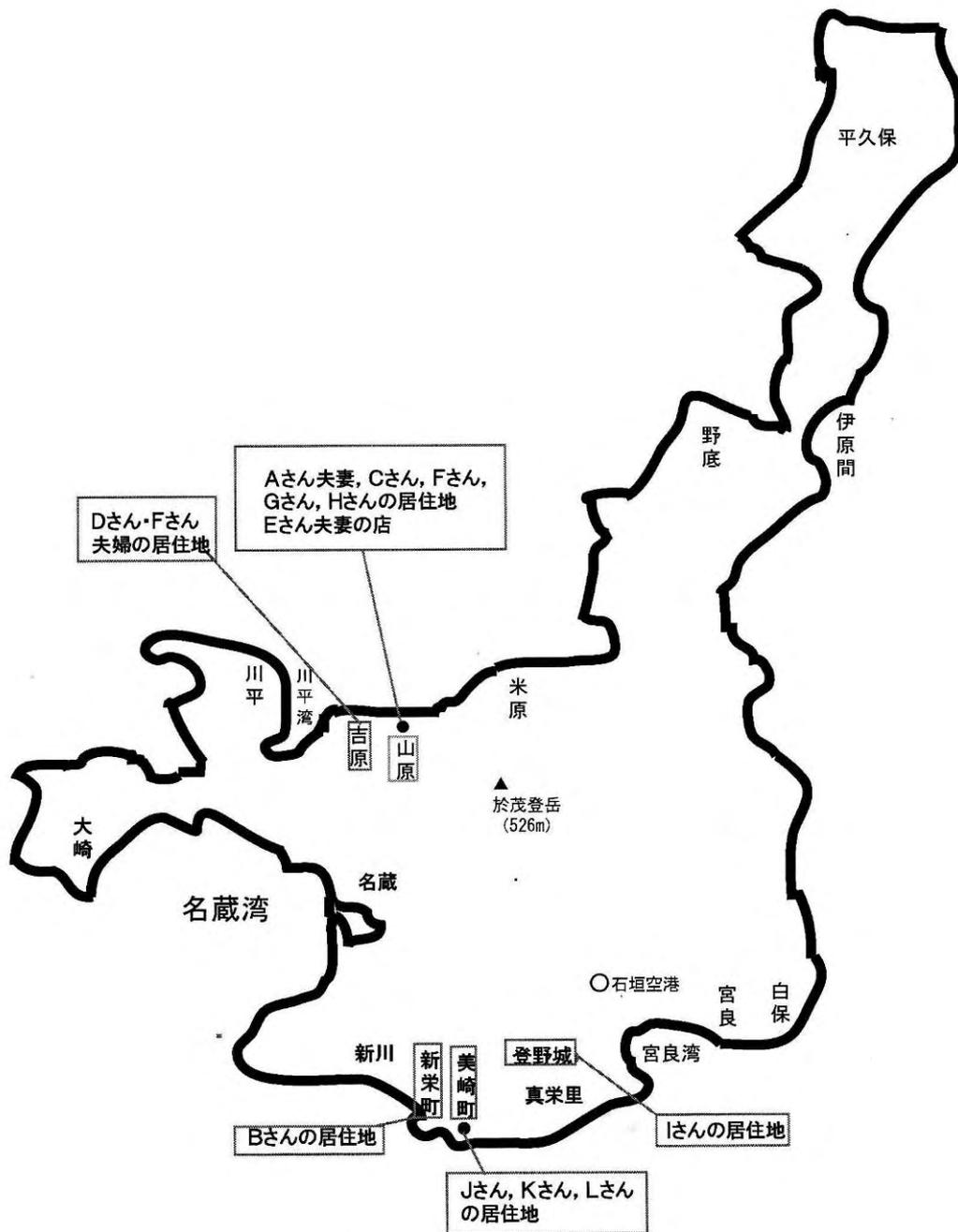


図 12 石垣島地図および聞き取り調査対象者の居住地

「沖縄県広域詳細道路地図」をもとに作成

以前から夫婦でいつかは海や山などの自然があり、あたたかいところで田舎暮らしがしたいと考えており、漠然と沖縄ということは考えていたようであるが、具体的に石垣島というところまでは絞り込んでいなかったようである。妻もハワイへは過去何度も行っただけの経験があるということだったので、ハワイへの移住は考えなかったのか質問をしてみたところ、地理的距離が遠すぎる、日本語での生活が難しくなってしまうこと、文化的な相違が大きいことがあるため、移住は考えなかったということだった。具体的に候補地を絞り込んでいく際には、まず生活の利便性を考慮し、本島および、離島の中でも比較的インフラ整備が進んでいる宮古島と石垣島を候補地としていた。その中で最終的に石垣島への移住を決めた理由としてはまず、石垣島には基地がなく、また上陸戦がなかったことによって、沖縄の他地域に比べると精神的なハードルが少ないように思われたこと、実際に旅行で石垣島を訪れたときに雰囲気はハワイのマウイに似ているように感じられ、気に入ったことなどを挙げていた。

とはいえ、観光旅行で訪れていたところから実際に移住へ踏み切ったのには2人の移住前の生活が大きく影響していると発言内容からもうかがい知れる⁸⁾。都会での仕事に追われる生活をリセットするために沖縄へ移住し、「ゆるやかな、スピードのそれほど速くない生活」を期待していたのである。ここで留意しておきたいのは、沖縄の生活＝「ゆるやかな、スピードのそれほど速くない生活」という観念を自明のこととして無意識のうちに表していることである。そうした沖縄における時間感覚というもの、沖縄イメージ形成の過程で生じた産物なのかもしれない。

さらに、移住に際してどのようなイメージを持って移住してきたのかという質問に対しては、家計など経済的なことや趣味で陶芸をしていくことなど、具体的な生活に対するイメージについての返答が返ってきた。自然や文化などの「沖縄イメージ」について触れてみると、言葉ではうまく説明できていないが、移住に際してそういった「沖縄イメージ」が前提にあるということを答えている⁹⁾。そうしたところからも、あえて語られることがないぐらいに「沖縄イメージ」というのは浸透し、無意識のうちにそれをイメージとして持っているということがわかる。

また、石垣島において具体的に居住地を決めるにあたっては、4年前に観光で石垣島を訪れた際にたまたまみつけた山も海も近い現在家が建てられているところの土地が気に入り、土地のみをすでに購入していた。購入してすぐには移住することは考えていなかったようだが、夫が体調を崩して仕事を休んだことをきっかけに移住を決断したということである。観光で訪れた際にたまたまよい土地をみつけた

8) 「2人とも忙しく、頑張ってたので、はやく違う生活をリセットできるチャンスはそれぞれ二人とも持っていたとは思いますが。わたしも40になったら、その、違う生活をしたいなっていうのを思っていて、40過ぎて、しばらく、45までには何とかしたいなと思ってたら、42ぐらいだったんですけど、都会、都会っていうか、東京の仕事でぎゅうぎゅうしている生活だけじゃない、違う人生をもう一回やりたい。」とか「もうちょっとゆるやかな、スピードのそれほど速くない生活で、豊かな生活っていうものはどんなものが知りたかった。」という発言に基づく。

9) 「ちゃんと説明できてないっていう、当然それがあるから来てるっていうのはあるよね。」という発言に基づく。

ので購入したということであるが、もうこの時点ですでに純粋に観光だけを目的とした旅行ではなく、移住を視野に入れつつ旅行していることがわかる。8年前に初めて石垣へ旅行して、その後数回にわたって石垣を訪れたということであるが、繰り返し石垣島へ訪れ、現地のことについてより詳しく知るうちに観光対象ではなく移住対象へと変換していったのである。

(c) 事例②

Bさんは埼玉県出身の50代後半の男性で、会社員をしていたが、早期退職をし、居酒屋を経営していたが、3年前に夫婦で石垣島へ移住し、現在は石垣市役所近くの市街地でラーメン店を経営している¹⁰⁾。8年くらい前から沖縄へ毎年旅行するようになり、本島や石垣島をはじめとするさまざまな離島も訪れた。石垣島は特に気に入り、3、4年間連続で毎年毎年訪れていたということである。沖縄へ旅行する前は海外旅行が中心であった¹¹⁾。他の国内地域へ旅行しなかった理由としては、「後半になると、一応住む前提みたいなことを考えながら旅行していたので。」ということであった。

移住するにあたってどのようなことを移住の条件にしていたのかということ、移住後、商売をしたいと考えていたため、なるべく競争が激しくないところであることと、あたたかいところで住みたいということが前提にあった。「あたたかいところ」という条件に関して言えば、旅行に際して移住を意識していたうえで、沖縄以外の地域には行っていないことから考えて、「あたたかいところ＝沖縄」というイメージが無意識に作用しているということがわかる。

さらに具体的に石垣島へと居住地が絞り込まれていったのには、先に述べたように、商売をしていく上で競争があまり激しくないことというのももちろん大きく影響していると考えられるが、単にあたたかい気候だけを求めて移住するのではなく、都会とは違った環境を移住後の生活に期待していた¹²⁾。そのため、都市化している本島ではなく、移住先を離島に求めるのである。しかし、離島であっても、ある程度の生活を保証されていなければならない。都会過ぎず、しかし、ある程度インフラが整っていて生活の利便性もあるという条件を満たす場所として石垣島が選択されたのだ¹³⁾。

(d) 事例③

10) 石垣島へ移住してきた頃は川平に1ヶ月賃貸を借りて生活をしていたものの、生活の不便さや商売をすることを考えても市街地の方が都合がよいと考えて、市街地の方へ引越しをしてきたということである。

11) 主な旅行先としてはタイやベトナム、グアム、サイパン

12) 「それも沖縄でも、あんまり都会は嫌いなんですよ、わたしは。だから那覇は嫌いだから、東京とあんまりかわらない、人も多い、車も多い。」という発言にもとづく。

13) 「その中で、離島の方でライフラインがしっかりしているところが最終的に石垣島なんですよね。あとはもう病院もないし、もちろんスーパーもコンビニもないし、そういう離島がぼこぼこありますけど、そこまで行く元気はないんです。」という発言にもとづく。

Cさんは千葉県出身の50代の男性で、会社を早期退職し、約5年前に妻と2人で移住してきた。昔から趣味であった昆虫の研究をしながら、現在は石垣島の吉原地区で主に観光客向けに昆虫の博物館を経営している。沖縄本島へは15年ほど前から何度も訪れていたそうである。沖縄本島へ来ていた理由は本土にはいない種類の昆虫がいるためで、観光目的はほとんどなく、旅費の関係もあって、移住直前に石垣島を初めて訪れるまでは本島以外の地域には行ったことがなかった。

移住を考えたきっかけは、昔から趣味として行っていた昆虫の研究をするためであり、もともとはインドネシアやマレーシアといった1年中昆虫の研究をすることができる南方の国への海外移住を考えていた。しかし、近年テロなどが多発し、治安が悪化したことなどを理由に海外への移住を断念し、日本国内で1年中昆虫の研究ができるところ(=沖縄)へ移住することにした。移住先を国内へと変更したときに、最も海外と近い自然環境や気候条件を満たし得るのが沖縄であり、「海外の代替」としての沖縄の側面を見出すことができるのではないだろうか。そうした側面は前に紹介したA夫婦のインタビュー内容からもみてとれる。インタビューにおいて、ハワイと沖縄の類似性を指摘したうえで、それが移住先を石垣島に決めた1つのきっかけになっていた。沖縄の持っている地理的条件や自然環境は日本というよりはむしろ海外、特に南方の国々と類似する点が多いため、言語の壁など国境を超えることなく、「手軽に味わえる海外」としての役割も割り当てられているのである。

昆虫の研究というのが移住先決定の軸にあるため、昆虫の研究に関すること以外で移住後の生活に対する期待やイメージを意識したというのはほとんどないと答えていた。石垣島を移住地として選択したのも、年中昆虫の研究に取り組めるからであるという¹⁴⁾。しかし、突き詰めて聞いて見ると、写真などを媒体として、間接的に沖縄の自然などのイメージを享受していた可能性があると言った¹⁵⁾。さらに実際に移住してみて「時間がとまったような感覚」を感じるようになったということであった。このように移住前のイメージだけではなく、訪れてみて新たに追加されるイメージというのもある。

さらに、生活の利便性も重視したうえで石垣島、さらに石垣島内での居住地を絞り込んでいった。石垣島で具体的に居住地を絞り込んでいく際には、インターネットを主に利用したということである¹⁶⁾。インターネットで物件の検索をしている際、それぞれの不動産会社などがどのような物件をどのように

14) 沖縄本島以上に生息している昆虫の種類が多く、日本国内では最も多くの種類の昆虫が生息しているのが八重山諸島で、1年を通してずっと昆虫の研究に勤しめる。

15) 「小さい頃から、あの～、沖縄とかの写真、蝶の写真集なんか見るにつれて、蝶のすばらしさだけでなく、風光明媚なところとか、そんな認識はもちろんありましたよね。だから、別に石垣島の、沖縄石垣の風光明媚を無視するんじゃないくて、それも舞台として、ステージ上にあるっていう前提ですけれどもね」という発言にもとづく。

16) 現地の土地・物件に関する情報についてインターネットで検索し、そこから50件もの候補地を見つけ出して、3泊4日で物件確認のため現地に滞在した。50件の候補地は現在住んでいる吉原周辺だけではなく、白保、伊原間、野底、あと市街地周辺とさまざまな場所のさまざまな物件を候補にしていた。

紹介していたのか当時のことを思い出し、記憶をもとに話してもらったところ、紹介されている物件そのものの数などには偏りは見られないようだが、紹介されている場所によっては移住者を意識したようなPRもとられていたようである¹⁷⁾。つまり、少なくともCさんが移住しようと情報収集をしていた6年前の段階ではすでに移住者を意識した動きがあったということである。

(e) 事例④

横浜出身のDさんは現在、吉原地区に在住し、夫婦で焼物の工房をひらいている30代の男性である。

18)

移住前は、沖縄で教員をしていた友人の姉のところへたびたび遊びに行っていた。沖縄に実際行く前は沖縄に対してそれほど興味も関心も持っておらず、海がきれいなイメージぐらいしか持っていなかったということであるが、初めて沖縄の本島を訪れたときに一番興味を持ったのが米軍であった¹⁹⁾。「沖縄＝海がきれい」という表向きの沖縄イメージと実際に沖縄本島を訪れたときに目の当たりにした「米軍の基地」がある現実の沖縄の間には大きなギャップがあるが、そうしたイメージのギャップには実際行って初めて気がつく場合が多い。第Ⅱ章でも述べたように、多くの人々が抱く沖縄に対するイメージは、沖縄の観光開発の中で創り出されてきたイメージであり、排除された現実も存在している。その1つが沖縄の米軍に関することであり、都合の悪い現実には表には出てこないで、沖縄の自然・気候・文化の魅力だけが前面に押し出されるのである。しかし、それを受け取る側はそうした前面に押し出された沖縄イメージだけをもって沖縄というものをとらえがちになるのである。そのことがDさんの発言からも読み取ることができる²⁰⁾。

17) 「街中の販売物件もあったし、ばらつきがありましたね。あの、地元の人が買うのは、もう、街中しか買わない。島ですけども、地方に行こうなんていうのは思いませんから、街中以外、団体以外のところ、販売するってことはもう、本土向けの販売しかないんですね。住む人は本土の人しかいないから。だから、そういう動きをもう石垣の不動産も何かしら動き出していたので、まあ、移住のどうこうっていうのはあったんでしょうね。そういう街中以外のところの部分っていうのは、景色がいいとかね。そんなPRコピーでしたよ。」という発言にもとづく。

18) 移住前は飲食業を営んでいたが、自分で店を開くために石垣島へ移住し、2年間はアルバイトで生計を立てた後に2年間飲食店を経営、その頃から焼物に興味を持ち始め、経営していた店を手放して、焼物の勉強の為に2年半本島へ行った後、再度石垣島へ戻って、知り合いから譲り受けた工房で観光客向けに焼物教室をしながら生活している。

19) 当時大学生だったDさんは沖縄の米軍基地に関する卒業論文を執筆した。

20) 「あのときはね、今でも覚えているよ、JALのね、キャンペーンガールがね、森高千里だったのね、確か。あ、夏になったら、JALがキャンペーンをね。そのときに森高千里だったんだよ。あ、森高千里だ、青い海だみたいな。」という発言にもとづく。

Dさんは沖縄本島を訪れた後、離島にも興味を持ち始め、波照間島や石垣島などへ行った。本島に旅するうちに、本島だけではなく、他にも多くの島があることに徐々に目が向けられるようになっていく過程、すなわち「分化」が生じてきたのである。そして、数回訪れているうちに移住を意識し始めていたということである。移住をしようと思った理由について尋ねると、途中で数秒間だまってしまい、沖縄の自然の要素をいくつか並べて、「なんともいえない」と回答しているところ²¹⁾から、合理的な理屈があつて移住をしようと思うのではなく、もっと感覚的なレベルで移住をしたいと思わせるものがあることが読み取れる。

具体的に移住先を石垣島にしたのには、一番ビジネスチャンスがあるとDさんが判断したのが石垣島だったからである。本島だと、都会過ぎて本土で店をだすのとそれほど変わらないと考える一方、石垣以外の規模が小さな離島では長期滞在は難しいと考えたということである。つまり、具体的に移住先を絞り込んでいく中で、本島のように都市化されているところではなく、かといって生活の利便性が整っていない離島でもなく、そのちょうどバランスの取れたところに石垣島が存在しているので、移住先として選択されやすいという構図になっているのである。

(f) 事例⑤

Eさん夫婦は共に30代前半で移住前は横浜に暮らしていたが、2年前に石垣島へ移住し、現在は川平に住まいを構えながら吉原地区で手作り雑貨の店を経営している。夫はもともと横浜で会社員をしていたが、3年前妻の知り合いが暮らす西表島へ遊びに行ったのをきっかけとして、自分たちもその暮らしぶりにあこがれ、西表島へ移住して店を持とうと夫婦で思うようになった。しかし、実際のところ西表島には店舗賃貸がなく、コスト的にも石垣島で店舗を借りて店をひらく方がよいと判断されたため、石垣島へ移住先を変更した。夫は移住前に西表島へ行ったのが最初であるのに対し、妻は10年ほど前にヘルパーの仕事をして数ヶ月間西表島で暮らしていた経験がある。このように、夫婦間に大きな差があつたために、移住に対しての意識の差も大きかつたため、聞き取り調査を別々にさせてもらった。

夫は、西表を訪れる以前は沖縄に対して特別興味を持つということではなかつたようである。興味がほとんどなかつた状態から、移住というところまで意識を変化させたのには西表へ実際に行ったことが大きく影響しているようである。自然に囲まれたスローライフにあこがれるようになったと以前の現地調査のときに語っていたが、あこがれの段階から実際に移住しようと考えるところまで大きく気持ちを変化させた具体的な要因について尋ねると、その返答から本人も自覚できていないような印象を受けた²²⁾

21) 「特別な理由ね…(数秒間沈黙)…そうだね～…たぶん、やっぱりね、…(数秒間沈黙)…きっと気持ちよかつたんだろうね～、なんともいえないな～、ほんと、海と山と、熱い太陽とね。まあ、本当、開放的だったというか、なんか、そうだね～、そんなところかな～。」という発言内容にもとづく。

22) 「う～ん…どう…(数秒間沈黙)…まあ、徐々にというか、時間がたつにつれて、思いが強くなつてつたんですね。」という発言にもとづく。

。このことから移住しようという気持ちに駆り立てたものは本人でもはっきりとは自覚できない衝動的なものであったのではないだろうかと推測される。実際に西表島でのリアルな生活を見ることによって、西表島での生活イメージというのが具体的に形成される。そして、そのイメージに対するあこがれとか衝動的な感覚が移住をしようというところまで気持ちを高めたのではないだろうか。

妻は10年ほど前に西表島で数ヶ月間ヘルパーのアルバイトをしながら暮らした経験がある²³⁾。沖縄に旅行しようと思ったのも、沖縄のあたたかさは気候的に旅行するにはよいと思ったからで、特別沖縄に対して興味があったというわけではない。旅の途中、西表に長期滞在した理由としては、西表の自然に魅力を感じたことをあげている。ただし、そうした自然のすばらしさを具体的に行く前からイメージし、それを期待して行ったわけではないようである。もちろん知人から西表がいいところであると紹介されたときにいくらか自然のすばらしさや魅力について語られていた可能性はあるので、あるいは、自分ではイメージや期待を持っているという自覚がないまま西表を訪れていたのかもしれない。西表島への移住については、いずれ何か専門的なスキルを習得してから移住したいとは漠然と考えていたようであるが、移住することを現実的には考えてなかったということである。現実的に移住について考え始めたのは夫と同じく、3年前に西表へ行ったときだったようだ。

(g) その他の聞き取り調査

ここで上記に記した5つのケース以外についてもみていくことで石垣島の移住の傾向について検討する。

聞き取り調査の対象者は多くの場合、自分で店を経営するなどして生計をたてているか仕事をしていない場合や店を経営していても生計を立てることを目的としていない場合は基本的に定年退職者や早期退職者で、退職金など十分な蓄えがあることが前提となっている。またこのような場合は、例えばIさんのように、移住を考えてから実際移住するまでにある程度時間をかけて計画的に移住を実行している場合が多い。それに比べて、若い年齢の移住者ほど、わりと身軽に移住している印象を受ける。

また、移住前の石垣経験や移住目的にいくつかの傾向を見出すことができる。例えば、H、I、Jさんの場合、移住前からマリンスポーツを趣味としていたこともあって、石垣島のみならず、沖縄のさまざまな離島を訪れた経験がある。そして、マリンスポーツの趣味があることが移住の動機に大きく影響している。AさんやBさんのような観光リピーターの移住とは違ったパターンの移住者といえるだろう。また、KさんやLさんのように実際に移住しようとするまで石垣島を訪れた経験がなく、「あたたかい」などのイメージに基づいて移住しようとするイメージ先行型の移住者もいる。

(h) 考察

23) 長期の旅行で最初は沖縄の本島へ行くつもりであったが旅の途中で出会った人に石垣や西表へ行くことを進められた。

以上に挙げたケースはそれぞれ、沖縄へ移住してきた経緯や目的も異なるが、共通して言えることの1つは調査対象者の多くが「リピーター」であるということである。訪れるまでは「沖縄」という大きな枠でしかとらえられていなかったものが実際訪れることにより、具体的な像を持ち始め、さらに、興味・関心がシフトしていくというひとつのパターンが見出せる。また、もとは沖縄へ観光や趣味が目的で訪れていたが、繰り返し沖縄を訪れるうちに沖縄への定住志向が生まれてくると第Ⅲ章で述べていたことともつながる。一方でKさんやLさんのように沖縄経験がほとんどなく、Fさんのように本に紹介されていた沖縄移住に影響を受けるなど、イメージ先行で移住してくる人も若い人を中心に多くなってきているようだ。そのため、第Ⅴ章でも記述するが、移住支援を行う移住仲介業者や不動産業者の中には沖縄移住や離島移住のいい面ばかりを植えつけるだけでなく、現実の移住生活についても認識させるような情報提示の仕方をしているものもある。

さらに、石垣島を移住先として選ぶ動機についても共通点を見出せる。移住者たちが移住先に求めるものはそれまでの都会暮らしとはむしろ逆の豊かな自然に囲まれたゆったりとした生活であることが多いため、本島は移住者からあまり好まれていない。そうはいつても、生活していくのに不自由なほどライフラインが整っていないような離島も困るので、そのどちらもバランスよく兼ね備えた場所ということで石垣島が移住先として好まれるのである。

しかし、別の見方をすれば、完全に移住者の主観だけで選択されていくのではなく、実は生活の利便性という面から選択肢が限定されているとみることもできるのである。E夫婦の場合、西表島への移住を当初は希望していたが、西表島に賃貸の店舗がなく、店を開くことができなくなってしまうために、結局西表島は断念し、石垣島へ移住している。また、石垣島でもさらに具体的にどの地域で暮らすかということを選択する際にはさらに現実的な条件が関わってくることになる。Bさんの場合、最初は川平に暮らすつもりであったが、生活の不便さとラーメン屋を開業することを考えて、市街地に移り住んだ。Cさんの場合は石垣島の中から50件も候補地を挙げた上で、コストの面や道路に面しているかどうかといった条件と照らし合わせて住むところを決めている。人によって何を生活の中に求めるのかということにおいて多少の差はあるものの、最終的には実際に不自由なく生活していけるのかどうかということが意志決定に大きく影響しているのである。

そうした意志決定を助けるものとして、移住者サポートを行う移住仲介業者や移住者向けに物件紹介を行う不動産業者も増えてきている。また、移住体験などを紹介する書籍や雑誌なども含めて移住者を対象とした「移住ビジネス」²⁴⁾が盛んになってきている。以下の章ではそうした「移住ビジネス」の現状をみていきながら、「移住ビジネス」が移住ブームに与えた影響をみていくこととする。

24) 八重山毎日新聞 2006年11月4日付の「加速する『移住ビジネス』」という見出しの記事による。

V 移住ビジネス

1) 書籍による移住紹介

(a) 移住関連図書

近年の沖縄移住ブームに前後して、沖縄での移住に関する雑誌や本、いわゆる「移住本」が数多く出版されている。移住本の内容としては沖縄への移住をすすめるものや、現地での生活（職や住むところなど）についてさまざまな情報を提供するものであったり、実際に沖縄へ移住した人によって書かれた移住体験記的なものも多くある。Fさんが沖縄への移住を考えるようになったきっかけは母親が沖縄移住に関する本を読んでいてと語っていたことをふまえると、こうした移住関連図書が出版されることによってより多くの人に沖縄移住を認識させると共に、興味・関心を引く役割を果たしていると考えられる。

WebcatPlus²⁵⁾により、「沖縄移住」をキーワードにして連想検索で書籍の検索をしたところ、13609件もの関連書籍があることがわかった。ただし、この件数の中には沖縄からの海外移住に関連する図書も若干数含まれている可能性があるが、そうであったとしても、かなりの数の移住関連図書が存在していることがわかる。「沖縄移住」に関する書籍は1995年頃にははやくも出版されはじめており、その後徐々に発行数を増やしており、2000年以降は発行数の増加が特に顕著である。このことは沖縄移住に対する興味や関心が高まり始めた時期がちょうどこの時期であることを示しているといえるだろう。

(b) 移住関連雑誌

沖縄観光関連雑誌だけではなく、沖縄移住関連雑誌も近年では発刊されるようになった。沖縄移住雑誌としては『沖縄スタイル』（樫出版）や『沖縄に住む』（食の王国社）が代表的なものである。雑誌の内容としては、定年退職後の移住をすすめるものや、不動産物件ツアーでの様子などその他移住に関連する情報を掲載している。また、沖縄の美しい自然や情緒ある沖縄の家屋の写真などが多く掲載されている。こうした写真を用いることによって読者にこうした風景の中での生活についてよりリアルにイメージさせ、視覚的にも沖縄移住の魅力を伝えることを狙いとしているように思われる。Lさんは雑誌で石垣島についての記事を見たことで石垣島に興味を持つようになったと聞き取り調査で語っている。留意すべきは、これらの沖縄移住関連雑誌の企画・編集に沖縄移住業者が携わっているケースが多いということである。つまり、沖縄移住関連雑誌の発刊は、昨今の沖縄移住ブームに目をつけた出版社の単独行動ではなく、そこには同じくブームにおいて利益をあげようとする移住仲介業者が大きく関わっているのである。移住仲介業者が移住雑誌の制作に携わることでより多くの人に沖縄移住に関心を持たせ、さらには不動産ツアーなどの記事を掲載しているあたり仲介業者のビジネスアピールもかねているの

25) 設定したテーマに関連する図書を検索できる。検索方法には検索キーワードからそれに関連する図書を検索する「連想検索」と書名や著者名を入力し、必要な図書をピンポイントで検索する「一致検索」の2種類がある。

である。

以上にも述べたように、移住関連図書・雑誌の出版が沖縄移住を一般に広め、興味・関心を高めると同時に、このような出版物に掲載されている沖縄の美しい自然や情緒ある沖縄の家屋とその風景の中で生活を営む人の写真によって、よりリアルな沖縄での生活像をイメージさせる役割を果たしているといえる。リアルな沖縄での生活に対するあこがれがさらに移住を助長させるのではないだろうか。

2) 移住仲介業者・不動産業者

沖縄移住を具体的に考え始めたときに、現地での住まいや仕事などについてサポートする事業を行うのが移住仲介業者や不動産業者である。多くの場合は移住仲介と不動産業が何らかのかたちでリンクしている場合が多く、HPなどを通して沖縄移住に関する多くの情報を提供している。そのため、沖縄への移住希望者にとっては大きな情報源になっているものと考えられる。聞き取り調査の対象者の中には移住仲介業者を利用した人はいなかったが、Eさん夫婦が居住地を決める際に現地の不動産業者をあたったことや、CさんやKさんはインターネットを利用して不動産の情報を不動産業者のHPなどから入手していたことからしても移住希望者にとって大きな役割を果たしていることがうかがえる。そこで、いくつかの移住仲介業者および、不動産業者をモデルケースとして取り上げ、その事業内容やHPの内容などから沖縄への移住希望者に対して具体的にどのような働きかけをしているのかということ明らかにした上で移住希望者と移住仲介業者・不動産業者との関わりをみていくことにする。また、モデルケースとして取り上げる業者のうち、R社の社員からは実際に話を聞くことができたので、そのインタビュー内容（資料5）からも業者の事業実態をみていく。

(a) O社（那覇市）

O社は那覇市を拠点に活動をしており、テレビや雑誌などでもよく取り上げられている会社である。主な事業内容としては、沖縄への移住支援のほかにも海外移住支援や起業支援、コンサルタント業務、就職・転職相談、引越し荷物や車輸送の手配などがあり、多岐にわたっている。その中でも特に、沖縄移住支援の具体的な内容についてみていくことにする。沖縄移住支援の内容を大きく分けると、移住支援サポート、下見サポート、沖縄移住に関する情報提供がある。

移住支援サポートとは、引越しや住民票手続き、就職・進学など移住希望者が移住して生活をはじめまでの過程をサポートするというものである。O社では不動産物件の紹介業も行っているため、移住先の条件など移住希望者の要望に合わせてそれに見合う物件を紹介しているものと考えられる。また、引越しや就職・進学に関しても自社でサポートすることが可能であるようだ。この移住支援サポートに関しては、複数のプランが用意されており、支払う料金によってサポートの内容が変わってくるという仕組みになっているようである。

下見サポートは、移住希望者を実際に移住予定地や不動産物件の下見へとつれていくサービスである。料金は下見に要する時間によって異なるようであるが、単に下見につれていくだけではなく、本土から

沖縄への格安航空券や格安宿泊施設の紹介、レンタカーの手配なども特典としてついてくるようである。この下見サポートについてはかなり人気があるらしく、HPには現在のところ数ヶ月後までは満員でキャンセル待ち状態が続いているという旨のメッセージが掲載されている。沖縄移住の下見についてはO社のみならず、その他の業者・企業でも実施されているようである。

沖縄移住に関する情報提供もHPを中心に充実している。沖縄の気候や自然、文化や歴史に関するものから、沖縄のそれぞれの地域に関する情報、不動産・土地情報、ホテルやマンスリーマンションといった宿泊施設情報、職や教育など沖縄での生活に関わる情報、離島移住や定年退職者の移住についてのアドバイス、移住失敗例、O社を利用して移住した移住者による体験談などがHPには掲載されている。近年、沖縄へ移住する人の数も相当多いものの、一方で沖縄での移住に失敗し、本土へ帰っていく人も多いという現状がある中、沖縄移住の失敗例を掲載すると同時に、O社を利用して沖縄で楽しく移住生活を送っている人たちの声を載せることでO社のような移住をサポートしてくれる第三者の必要性をアピールする効果があるように思える。また、あえて定年退職者の移住について取り上げられていることからみても、団塊の世代を中心とする定年退職者たちが沖縄移住のターゲットとして期待されていることがうかがえる。

(b) R社（那覇市）

先述したように、R社については社員の方からR社の事業内容や沖縄移住に関してインタビューを行ったので、インタビュー結果（資料5）も参考にしながら、R社の事業内容についてみていくこととする。

R社は出版・編集企画制作、飲食店のプロデュース・コンサルティング、商品パッケージ制作、広告代理店業務、イベント講演など沖縄移住支援以外にもさまざまな事業を展開している会社である。出版・編集業務については、音楽や飲食など沖縄に関する情報を発信する雑誌や沖縄の移住に関する雑誌の制作にも関わっている。

沖縄移住支援事業については、沖縄移住希望者向けのサイトを運営しており、サイトでは沖縄での生活や就職、不動産などの情報提供を主に行っている。沖縄移住支援に関してO社と異なる点は、まずO社のように移住者希望者に対して行われるサービスについて内容や料金システムなど具体的なことが掲載されておらず、沖縄移住についての情報発信やアドバイスがメインであるという点である。不動産物件情報に関しても、最新のおすすめ物件としていくつかの物件が紹介されているが、R社において下見につれていくサービスは行っていないようである。また、社員の方の話によると、こうした物件の紹介において特定の不動産会社と特別に提携を結んでいるということはなく、沖縄のさまざまな不動産業者が提供している物件情報から好条件であるものを選んで情報提供をしているということであった。

また、R社では主に本島の諸地域への移住を奨励している。R社では石垣島などの離島への移住について問い合わせが近年多いようであるが、R社としては離島移住のリスクについて相談者に対して喚起を施すようにしているということである。離島への移住を奨励できない理由としてはまず、本島に比べ

ると離島の方は生活の利便性が低いことが挙げられる。特に、移住者が高齢の場合には病院などの施設数が離島の場合は少なく、居住地からは遠い場合が多いのでなかなかすすめることができないということであった。また、もう一つの理由としては、これは特に石垣島に当てはまることであるが、急激に移住者が増加することによってさまざまな問題が発生しているということがあるようだ。

(c) H社（石垣市）

H社は石垣島を拠点に、石垣島の物件の紹介を行う不動産会社である。紹介している物件の傾向をみると、アパート・マンションは南部市街地周辺に比較的集中しているものの、土地については南部の市街地周辺だけでなく、北部の海沿い地域にも分布している。特に北部の海沿い地域では写真やコメントを通じて美しい海を見渡せる眺めのよさをアピールしていることが多い。一方、それに対して南部市街地周辺地域の物件紹介では、生活の利便性のよさをアピールしているものが多く、同じ石垣島であってもそれぞれの地域によって趣が大きく異なっていることがわかる。また、レンタルルームといういわゆるウィークリー・マンスリーマンション的な貸家も存在し、数日単位で暮らせる施設も紹介されている。こうしたウィークリー・マンスリーマンションが増えてきた背景には第Ⅲ章で述べたリピーターの長期滞在志向や近年の移住ブームが関係しているものと考えられる。一時的にこうした施設を利用して石垣島での暮らしを体験してみたうえで移住をするか否かを決める移住希望者が増えてきているのである。さらには、一時的に石垣島で生活するつもりでやってきてそのまま暮らしつづける人がいることで幽霊人口の増加にも関わっているものと考えられるのではないだろうか。

また、H社のHPでは不動産情報だけでなく、石垣島への移住に関する情報やアドバイスを多数掲載しており、いかに移住者の利用を意識しているかが窺い知れる。掲載されている情報の具体的内容としては、求人や土地・物件に関することや、景観破壊など石垣島で起こっている移住にまつわる問題についても言及している。移住希望者からの質問や相談に対する返答なども行われている。H社のように不動産業に主眼を置きつつも、一方では増えつづける移住者に対応するべく、自社で独自に情報収集を行って移住希望者向けに情報提供を行う不動産業者も存在している。

VI おわりに

海洋博の開催に伴い、沖縄特有の自然や気候を中心に「沖縄イメージ」が形成され、そして大規模な観光開発や航空会社の沖縄キャンペーンなどによって、沖縄が観光地として発展していく中で「沖縄イメージ」は人々の中に広がっていった。ただ漠然と「沖縄イメージ」として存在していたものが本島や離島というように切り離されてみられるようになり始めたのが離島の観光ブームであり、航空会社や旅行会社で企画されるツアーの宣伝などによって、「沖縄」という漠然とした認識から「沖縄の本島／離島」というイメージの分化がおこった。イメージはさらに「沖縄」へ観光客を呼び寄せ、観光発展を続

けていく中で、観光客のリピーター率が高まってくる。こうしたリピーターの中から長期滞在者、あるいは移住者へとシフトしはじめる者が現れはじめ、そこにメディアや移住仲介業者・不動産業者のはたらきも加わって、移住者が増加し、「移住ブーム」へとつながっていったと考えられる。

また、聞き取り調査を通してわかったこととしては、最初に移住する際には漠然としたイメージを持ち、そのイメージに沿って移住者が移住先を具体的に絞り込んでいけばいくほど、実際の生活における利便性やインフラなどの問題が意志決定に大きく影響を与えていき、移住者の主観だけに頼った移住地選好が為されにくくなるということである。そこからは移住者側はあこがれやイメージを持って移住先を選択していくが、その過程の中で選択肢が必然的に限定されていくという構造が浮かび上がってくる。

近年の沖縄移住ブームについて、海洋博の開催に伴う沖縄イメージの形成・分化やそれ以降の沖縄の観光発展の流れを通してみてきたが、第V章でも述べたように沖縄への移住増加を受けて、「移住本」なるものが出版されたり、インターネットでも沖縄移住に関する情報は移住を支援する移住仲介業者や不動産業者のHPや移住者のブログなどを通して容易に得ることができる。移住仲介業者や旅行会社は移住下見ツアーを企画するなど、「移住ビジネス」がさかんになっている。石垣島で聞き取り調査に応じてくださった方の中には観光客向けに商売をされている方も数人いらっしゃったが、最近では客としてくる観光客に石垣島での生活のことや、近辺に売だし中の物件はないかといったことを質問されることが増えてきているという。このことは移住を視野に入れて本土から訪れる人が増えていることを表しているといえるだろう。

こうした移住ブームのもと、石垣島では観光客数は毎年増えつづけ、マンションやアパートなどの建設が盛んで、一部の経済関係者には「沖縄では八重山の1人勝ち」といわれるほど景気は活気付いている。しかし、そのようにささやかれる一方で、それが石垣島の人々には十分に配分されていない現状や、石垣市の財政も以前財政難の状況を脱していない現実がある²⁶⁾。また、新たに生じている問題もいくつかある。石垣島における無秩序な建設ラッシュにより、海洋汚染や景観破壊が起こっていたり、移住者が居住している地区の道路や水道などのインフラが未整備な状態であっても、市は財政難のため早急に対処できない現状がある。しかし、市街地には移住者が経営する店なども多くあり、石垣島の経済の一端を担う存在として無視することはできないというのも事実である。現地住人は現地住人の、移住者は移住者のコミュニティが別に形成される場合が多く、地域との関わりに消極的な人も少なくはなく、住人同士の結びつきそのものが弱いところもあると言われている中で、互いが地域問題解決に向けてどのように連帯していけるかが課題であると思う。

(24546 字)

26) 八重山オンラインの2008年1月9日付の「八重山は本当に元気ですか」という見出しの記事による。

資料2 聞き取り結果概要

Aさん夫妻（夫40代後半、妻40代前半・山原地区在住）

- ・ 横浜出身
- ・ 無職（趣味で焼き物）
- ・ 移住歴1年；市街地→今年1月に山原地区へ
- ・ 移住前は夫婦ともに広告代理店勤務
- ・ 移住前沖縄へ行った経験
 - 夫の方は仕事で何度も訪れている。石垣へは7、8年前から数回夫婦で旅行
- ・ 移住の経緯
 - 夫婦でいつかは田舎暮らしがしたいと考えていた。海や山などの自然があるところということで沖縄を移住先の候補地に。具体的には生活の利便性も考えて本島・宮古島・石垣島に絞っていた。
- ・ 石垣島へ移住を決めた理由
 - ① 石垣島には基地がないことや、上陸戦がなかったことで他に比べて精神的ハードルが少ないように思えた
 - ② ハワイのマウイに雰囲気似ているように感じた（妻はハワイが好きで何度も行っていた）
- ・ 石垣島での居住地選択
 - 4年前に観光で石垣島を訪れたときに今暮らしているところの土地が気に入り購入していた（そのときはすぐに移住するつもりはなかったが、夫が体調を崩して仕事を休んだのをきっかけに移住）

Bさん（50代後半男性、新栄町在住）

- ・ 埼玉出身
- ・ 夫婦でラーメン店経営
- ・ 移住歴3年
- ・ 移住前は会社員
- ・ 移住前沖縄へ行った経験
 - 観光で石垣島や本島に行った
- ・ 移住の経緯
 - 会社を早期退職して何か商売をしようと思った。店を出すなら競争が激しすぎず、暖かいところでやりたいと思った。
- ・ 石垣島へ移住を決めた理由
 - 観光で石垣島を訪れたときに、田舎だが利便性の高いところに魅力を感じた。
 - 本島は都会過ぎて、東京や大阪と変わらない。
- ・ 石垣島での居住地選択
 - 最初は川平に1ヶ月賃貸を借りて暮らしていた。（ラーメン屋をする前に1年ぐらいいは何もせずのんびり暮らすつもりだった）

遊びには気軽だが、生活には不便だった。ラーメン屋をすることを考えても、市街地の方が客がある。

Cさん（50代後半男性・山原地区在住）

- ・ 千葉出身
- ・ 蝶の標本などを展示した博物館経営
- ・ 移住歴5年
- ・ 移居前沖縄へ行った経験
本島へは昔からよく行っていた。石垣へは6年前はじめて行った
- ・ 移住の経緯
息子の結婚を機に会社を早期退職。
昔から趣味であった昆虫の研究をするためにインドネシアやマレーシアなど南方の国へ行くことを考えたが、治安悪化などを理由に国内で1年中研究ができるところ（＝八重山諸島）へ移住先を変更した
- ・ 石垣島へ移住を決めた理由
 - ① 八重山諸島の中で生活の利便性を考えると石垣島しか残らなかった
 - ② 6年前に石垣島を訪れたときに好印象を持った
- ・ 石垣島での居住地選択
インターネットで土地を検索←コスト・立地条件
当時はそこまで地価は高くなく、むしろ建物にかかる費用のほうが多かった。
- ・ その他
農振からはずれた山原地区の土地は5、6年前には1度は完売したが、その後移住をやめて転売されるところが出始めた。
土地の値段の高騰の原因は転売にもあるといえる。

Dさん（30代男性・吉原地区在住）

- ・ 横浜出身
- ・ 焼き物工房（観光者向け）経営
- ・ 移住歴10年；石垣4年（飲食店アルバイト2年・飲食店経営2年）→本島2年半（焼き物の勉強）→石垣3年半（焼き物工房経営）
- ・ 移住前は飲食業
- ・ 移居前沖縄へ行った経験
友人の姉が沖縄で教員をしていて、たびたび沖縄へ旅行（本島、波照間島・石垣島）
- ・ 石垣へ移住を決めた理由
 - ① 飲食業をやっている自分の店を持ちたいと考えたときに、横浜で店を出すよりもビジネスチャンスがあると考えた
 - ② 南の島へのあこがれ←実際に石垣島を訪れてみて感じた雰囲気は南の島のイメージに合った
- ・ 石垣島での居住地選択

アルバイト・店経営時は市街地、島の人から工房を譲り受けたのを機に吉原地区へ

- ・ その他

移住に興味を持って観光にくる人が増えている。(観光客に暮らしについて質問されることが増えた)

→年配の人や、技術職を持った人(美容師など)が多い

Eさん夫妻 (30代前半、川平在住(店は山原地区))

- ・ 横浜出身

- ・ 手作り雑貨店経営

- ・ 移住歴2年

- ・ 移住前は会社員

- ・ 移住前沖縄へ行った経験

妻は10年前ヘルパーとして西表で暮らしていたことがあった

夫婦では3年前西表島の知り合いのところへ遊びに行った

- ・ 移住の経緯

3年前西表の知り合いのところへ行って、知り合いの暮らしぶりにあこがれるようになった→移住してデザイン関係の仕事がしたい

最初は西表へ移住して雑貨店をひらくつもりだった

- ・ 石垣島へ移住を決めた理由

生活する分には西表でも問題なかったが、西表島には店舗賃貸がなかった

店を出すことを考えると石垣の方がよかった

- ・ 居住地

予算などをふまえたうえで地元の不動産会社をあたった

- ・ その他

年配の観光客から、石垣での生活のことや山原地区でまだ残っている土地はないかなどよく質問される。

Fさん (30代女性・吉原地区在住)

- ・ 大阪出身

- ・ 焼き物工房(観光者向け)経営

- ・ 移住歴5年

- ・ 移住前は保育士

- ・ 移住前沖縄へ行った経験

観光で訪れた経験あり(そのときは移住など考えていなかった)

- ・ 移住のきっかけ

1人暮らしをはじめたいと考えていたときに、母親から沖縄（本島）への移住をすすめられた（母親は沖縄への移住に関することが書かれた本を読んでいた）

- 石垣へ移住を決めた理由

はじめは本島で暮らすことを考えたが、以下の理由で焼き物・藍染めが盛んな石垣島に移住を決める。

- ① 本島は都会過ぎて大阪に暮らしていたときとそれほど環境が変わらないこと
- ② 焼き物や藍染めに興味を持ったこと

- 石垣島での居住地選択

求人や生活の利便性を考えて市街地→結婚後、吉原地区へ

- その他

石垣へ移住後子供が生まれた場合、子供の教育のことを考えて小・中に子供があがる頃に内地へ戻りたいと考える人が多いようである。（学校が遠い。島には高校が3つしかない。）

※Dさんとは夫婦であるが、移住後結婚しているのでインタビューは個別に行った。

Gさん（60代男性・山原地区在住）

- 東京出身

- 無職

- 移住歴3年

- 移住前沖縄へ行った経験

10年ほど前からダイビングで石垣島や座間味島へ行っていた

- 移住の経緯

定年後、夫婦で沖縄への移住を考える

- 石垣島へ移住を決めた理由

- ① ダイビングができるところ
- ② 他の離島に比べると利便性が高い
- ③ 石垣島に暮らす人の人柄に惹かれた

- 石垣島での居住地選択

知り合いからの紹介で土地を購入

Hさん（50代後半男性・山原地区在住）

- 神戸出身

- 無職

- 移住歴2年

- 移住前は会社経営者

- 移住前沖縄へ行った経験

22年前から海が好きで沖縄のいろいろなところへ行っていた。

- ・ 石垣島へ移住を決めた理由
 - ① ダイビングやシュノーケリングをするために何度か川平を訪れているうちに漠然と移住したいと考えるようになっていた。
 - ② 島の人々が魅力的だった
- ・ 石垣島での居住地選択

10年前に旅行で訪れたときに、たまたま売却されていた土地を購入した。

Iさん（30代女性、登野城在住）

- ・ 東京出身
- ・ ダイビングショップ経営
- ・ 移住歴5年
- ・ 移住前はOL
- ・ 移住前沖縄へ行った経験

趣味がダイビングなので、観光で石垣島を訪れたことがあった
- ・ 石垣島への移住の経緯

ダイビングのときに使っていたショップが気に入りそこで働きたいと思い、会社を辞め、ダイブマスターの資格を取った。
その後、1度は東京に戻ったが、石垣島の方が時間的余裕もあり、生活しやすく感じたため、再度石垣島へ
- ・ 石垣島での居住地選択

ダイビングショップをするには川平など海沿いもいいが、生活が不便
生活の利便性がある程度あって、その上足を伸ばせば自然→市街地
- ・ その他

石垣島には内地出身者が多く、島人が内地人を受け入れる風土がそなわっている。

Jさん（40代男性、美崎町在住）

- ・ 大阪出身
- ・ 飲食店経営
- ・ 移住歴5年
- ・ 移住前は会社員
- ・ 移住前沖縄へ行った経験

沖縄各地を3か月間かけてまわった
- ・ 移住の経緯

南の島で暮らしたいと考えた（外国は言葉や治安などが問題）
- ・ 石垣島へ移住を決めた理由

自然が豊富だったこと

知り合いから店をやらないかと誘われた

- ・ 石垣島での居住地選択

最初は川平に住みたいと思っていたが、(当時は) あまり賃貸住宅がなかったこと、仕事がないこと、田舎すぎて生活に不便であることなどを理由に市街地に住むことにした。

Kさん (20代後半男性、美崎町在住)

- ・ 仙台出身
- ・ 宿泊施設従業員
- ・ 移住歴6年
- ・ 移住前はフリーター
- ・ 移住の経緯

仙台の寒い気候に嫌気がさし、1年中暖かいところで生活したいと考えた。

1年中暖かいところというのでイメージしたのが沖縄だったので、インターネットなどで沖縄について調べ、候補地を本島、宮古、石垣に絞る。(インターネットで調べた内容…気候、不動産、観光に関するサイトなど)

- ・ 石垣島へ移住を決めた理由

候補地を絞った上で何度か観光で訪れてみて、石垣島に暮らす人の人柄や住みやすさが気に入り、石垣で暮らすことにした。

- ・ 石垣島での居住地選択

求職や利便性を考えると、必然的に街中で住むところや仕事をさがすことになった

Lさん (30代前半男性、美崎町)

- ・ 宮崎出身
- ・ 手作りのアクセサリー・小物を販売する店を経営
- ・ 移住歴5年
- ・ 移住前はバックハッカーを2、3年していた
- ・ 石垣島へは移住前に行ったことがなかった
- ・ 石垣島へ移住した経緯

田舎のほうで暮らしてみたいと考えたときに雑誌でたまたま石垣島の記事を見た。

石垣島へは行ったことはなかったが興味を持ち、情報誌などを見て情報を集めた。

- ・ 石垣島での居住地選択

最初からアクセサリーや小物を作って店を出す気があったわけではないが、ものづくりをしながら生活したいと考えたので、人が集まってくるところを中心に探した。最初は露店販売をしていたが、その後知り合いの紹介で出店。

資料3 電話聞き取り内容

資料3-1 Aさん夫婦（吉原地区在住）

※電話インタビューを行ったのは奥さんの方

石垣島へ移住する前段階として沖縄へ移住をしようと決めた経緯は？

そもそも、いつか田舎に暮らしてみたいなっていうのがあって、で、その中で、あの～、いろんなとこいったことあるけど、どこがいかなかったかと思ったときに、あったかいとこがいいよねっていうようなところがあって、で、沖縄の文化とか生活っていうのをうちの主人の方からものすごく、仕事柄きいたことがあったので、沖縄が漠然とイメージにあった。

例えば、田舎ぐらしをしたいというのがあって、日本各地にいろいろ田舎がある中で暖かいところやあとは文化に惹かれたという点で沖縄ということなんですが、具体的に沖縄に移住して生活をするということに対して、どのようなイメージを持っていらっしゃったんでしょうか？

…（数秒間沈黙）…今の生活はそれほどイメージからは離れてないですよ。あの、もう、何ていうのかな～、無鉄砲に来てるわけではないので、計画的に来てるので、だいたい土地を購入して、その～、住むにあたってはこういうベース、何ていうかな、借家で、街中で住んでいて、けっこう街から遠くても、海が見えるところで、私の場合は陶芸やりながら生活していくベースがほしいなっていうので考え始めたんですけど、それで、いつかっていうのは、あの、最初に想像していたときよりは早かったぐらいですけど。

以前インタビューさせてもらったときにも、旦那さんの方は仕事の関係で何度も沖縄に行かれていたということなんですけれども、奥さんの方は沖縄の経験は？

沖縄はね～、ないです。あの～主人と一緒に旅行で石垣島に。あの、彼も離島はなかったの。

（旦那さんは）本島ばかりということですか？

本島ばかりだったので、このあいだも話したかもしれないけど、ひとつは沖縄の戦争とか、米軍の影響も少なくって、あの、本島と違って、気軽な、ちょっと楽な島であるということもあるのと、あと1つは、まあ、病院であるとかそういうのがある程度あるっていうのはでっかいとおもいますが、え～っと、あと私自身はウィンドサーフィンやってたので、ハワイに何度も行って、ハワイもオアフ島と他の離島があって、マウイ島と石垣島、沖縄本島とハワイのオアフ対マウイみたいな、ちょっと似てる場所があるんですよ。山の感じも似てたりするんで、そういうのも、ハワイまで行かなくてもいいんじゃないって軽いところがあります。

逆に、ハワイに移住しようっていう案はでなかったんですか？

ちょっと遠いっていうのと、そこはアメリカ圏なんで、日本語の方が楽だし、沖縄は日本の中ではちょっと違う文化だけど、アメリカほどは違わないから。向こうは全然違う。

先ほどご主人が何度も仕事で沖縄へ行かれてたということのをうかがったんですが、それより以前から、ご夫婦で沖縄に対して何か興味

などはあったんですか？

それは特にないんだけど。

そうなんですか。それじゃあ、仕事で行くようになってからって部分が（大きいんですか？）

それは、ほんとに彼が答えるべきなんだけど、社会的な意味で、返還されてきた沖縄について一般的な知識はあったらと思うけど、彼が行くようになったのは、10年以上前のことだから、そのとき彼は行き始めたときに、沖縄のその～テレビ局や新聞社あたりの人たちと沖縄文化研究会みたいなことをちょっとプライベートでみんなでやりながら、なんかそういう古いお話だとか、戦争の話しだけじゃなくて、なんかそういうのを昔調べたり、喋ったり、話し合ったりしてたんですって。言ってなかったっけ？

はい、仕事を通じて何度も沖縄に行かれたっていうのは聞いてたんですけど。

なんか、そういう仕事を通じた同年代の若い人たちが沖縄の勉強会をちょっとしてみたりだとか、でもまあ、一番はやっぱ仕事で沖縄の人たちと、沖縄の人たちに向かって、仕事をしていくことによって、得たものが大きいんだと思うんですけど、なんか、何十回か、三十回か四十回とか行ってるんですって。

そんなに何回も行ってるってすごいですね。

ただ旅行に行くのとは全然違うから、あの、深く入りますよね。いい意味でも、悪い意味でも、そうすると理解が深いんだと思います。

以前にも田舎ぐらしがしたいっていうことから本島は候補から外れたとうかがってたんですが、そこは最初から本島に住むつもりはなかったんですか？

あんまりなかったですね。本島だどうしても米軍が、感じずに生きてはいけなくなってしまうので。住んでれば、まだ、もともとそんなの関係なく住んでればなんてことはないでしょうけど、それを選ぶときにやっぱりちょっとしんどくなりますよね。触れずにいけないかと。わざわざ選ぶにはちょっとしんどいかと。

あと、実際わたしもこの前石垣に行ってみて、たしかに自然もたくさんあって、いいところだな～って感じたんですけど、じゃあ、移住してみたいかといわれれば、たまに観光で行くので十分やなと思ったんですけど、ご夫婦で何年前に石垣に観光でいらっしゃってたということですけど、それが移住っていうふうに変換していったのっていうのは、どういう（きっかけだったんでしょうか）。

えっと、これは旦那はちょっとわかんないですけど、その、正確な状況はわかんないですけど、2人とも忙しく、頑張ってるって感じだったので、はやく違う生活をリセットできるチャンスはそれぞれ二人とも持っていたとは思ってますね。

わたしも40になったら、その、違う生活をしたいなっていうのを思っていて、40過ぎて、しばらく、45までには何とかしたいなって思ってたら、42ぐらいだったんですけど、都会、都会っていうか、東京の仕事でぎゅうぎゅうしている生活だけじゃない、違う人生をもう一回やりたい。だから田舎ぐらして言っても、特別農業やるわけでもないし、自営業やるわけでもないの、あの～本当の意味での、よくある田舎の自給自足みたいな生活はしてませんが、もうちょっとゆるやかな、スピードのそれほど速くない生活で、豊かな生活っていうものはどんなものかを知りたかった。

実際に移住する前とあとではそんなにイメージに変化はないということだったんですけど、具体的にはどういうイメージをもってらっしゃったんでしょうか。

う〜んと、例えば何も知らずに来たら、想像を絶することってあるのかもしれないけど、あの〜ここかなって決めてから住むまでがわりと短かったの、2年半ぐらいかな？
ものすごくリアルに想像していたんですね。

例えばどういうところをリアルに？

というか、その、経済的な面で、いくら貯金があってからはじめて、毎日どれくらい使うかっていう、その経済的なものが生活の想像の1つと、あとは家と土地はもう決まっているから、あとは家を建てるんだけど、建てるために土地を何度も見て、こういうものを建てたらこういう風に生活していきだろうっていう想像があるのと、あと、陶芸をやるだろうっていう、陶芸をやるためにどういふうなことをやっていかないといけないかっていうようなこと。

今お話頂いたのは、自分たちの生活に関するイメージをはなしていただいたんだと思うんですけど、沖縄に対してのイメージ、というか、その土地に対するイメージっていうんですかね、生活の環境に対するイメージっていうのはありますか？

…（数秒間沈黙）…沖縄に対するイメージっていうのは、さっき沖縄文化が興味深いって、おもしろいって思っているんだけど、それにどっぷりつかりたいと思っているわけでもなんでもなかったの、あの、そこはわたしたちが今住んでるとこはほどよい距離感でいるんなものがみれるので、それもそれほど、なんていうの、住んでみてびっくりしたっていうのはないのね。あの、ここの地域は特に特殊なところで、その、昔からの人がすぐそばには住んでいないので、以外と今までと変わらない生活を送ることはないの。ただ、沖縄、東京ではないので、他の地方の都市がわからないんだけど、東京ではないので、あの〜なんていうの、役所のスピード感が遅いとか何か言ってもすぐできないとかね、そういうのはびっくりすることはいっぱいあるんだけど、家建てるにしても、何か注文するにしても、すごく対応が遅かったり、急に来たりするのはびっくりするんだけど、それもまあ人から話をきいていた通りだったので、ああ、これが石垣ねってある程度笑えるっていうのはいくらでもあるんだけど、環境っていう意味では、いまだにうちカーテンを、カーテン代の請求が来てないんですけど、カーテン付けに来るのに3ヶ月ぐらいかかって、かとおもったら急にやってきて、急に工事したと思ったら、だぁとつけていって、請求が来てないけど大丈夫かしらって思うようなことは確かにあるんだけど、そういうのはびっくりします。

おかげさまで、Bさん以外にも石垣に移住した方からいろいろとお話を聞かせていただくことができたんですけど、沖縄のイメージ、例えば海がきれいだったり、自然が豊かだっというような沖縄に対するイメージに対してのあこがれとかってうのを持って来られた方が多かったんですが、そういった面というのはどうでしょうか？

ちゃんと言えてないかもしれないけど、それはベーシックにありますね。

もともと、無意識というか、意識はしてないけれども…

ほんと言っていないかもしれないけれども、やっぱ海が見えるところに住みたいと思ったりとか、沖縄県で一番高い山がすぐそばにあるの

で、あの、内地的には低い山ですけど、自然が豊かだとか、あの、そこで遊んだりはあるし少ないんですけど、ダイビングもちょっとしかないんですけど、ちょっと船出すと、ものすごい日本では考えられないくらいの海がいっぱいありますから、やっぱり、自然環境ありき。

自分が意識してないところでそういったイメージが組み込まれている…

っていうか、ちゃんと説明できてないっていう、当然それがあるから来てるっていうのはあるよね。

そういったイメージはもう沖縄に来る前から持っているものなんですか？

そうですね。だって、漠としてはもちろん南の島っていうのは、漠としてはありますけど、あの具体的にどんだけ、どういうものがあるかっていうのは旅行できて、見てみたりとか、実際にいろんなツアーに行ってみたりとか、行って見て初めて具体的には知るわけですけどね。

資料3-2 Bさん（新栄町在住）

会社を退職されて、あまり競争が激しくなく、あったかいところで商売をしようと思ったという風に以前うかがったと思うんですけども、もうその時点からいきなり沖縄っていう選択肢しか挙がらなかったんですか？

え〜とね、いずれにしてもあったかいところには住みたいなっていうふうには以前から思ってたんで、それで、こっちに来る以前にわたし東京で居酒屋をやってたんですね、埼玉で、で、要は商売しかわたしは能力がないと自分では思ってるんで、え〜その中でも生活の足しになればいいなっていうことで、ラーメン屋か焼き鳥屋の両方の選択肢を持ってこっちに来たんですけども、来るにあたっては、え〜なんせ旅行、以前言ったと思うんですけども、旅行してて、いろいろ外国行っても、で、いろんな外国のことも考えたんですけども、あの、沖縄の石垣に毎年毎年、3年か4年ずつと来るようになって、まあ、ここだったら、日本で、日本なので、非常に生活もしやすく、老後、少しは仕事をしながら生活するにはいいなあって以前から思ってたんで、それで、そちらの方の飲食店の状況が非常に悪化したんですね。全体的に、交通の問題もあったり、飲酒運転の問題もあったり、いろいろなことで経済状況もあったり、非常に厳しい飲食店の状況に最初は東京あたりからなってきたわけですよ。え〜それにあたって、もうとにかく、住むところ移動することに、そうですね。住むところも変えようということで、まあ、あの〜、いささかの蓄えもあったので、1年間遊びながら、いろんな様子を見て、ここで実際住めるか住めないか、仕事ができるかできないかということで1年間余裕を持ってこっちに来て、それでまあ、いけそうだということでラーメン屋をはじめたというわけです。

先ほど、商売をするしないに関わらずいずれはあったかいところという風に考えていたとうかがったんですが、日本の国内であったかいところっていうふうにしたときにもう沖縄しか思い浮かばなかったんですか？

そうですね、もう以前からこちらに旅行して、だいたいの様子がつかめていたので、はい。

だから旅行ともしなかったら、決まっていなかったでしょうね。

じゃあ、その旅行経験があったからこそ、あったかいところ…

そうですね。だから、その基礎経験というのがあって、で、多少地理もわかってるし、まあそういうこと、そんなとき知り合いもできなかったのですね。そういうようなことが大きいでしょうね。

その、沖縄に旅行するようになったのってというのはどれくらい前からのことなんですか？

5年くらい前か、こっちへ来てもう5年だから、8年くらい前ですね。

何回ぐらい行ったんですか？

そうですね、毎年毎年来てましたね。

毎年毎年来てた理由っていうのは？

理由はうちの、あの～、奥さんもスナックやってましたし、え～わたしもサラリーマンやってましたけれども、年に1、2回旅行するというのがうちの、なんていうんですかね、年間スケジュールみたいのがありまして、それで旅行するということになって、それですと、一回来た時に気に入ってたんで、え～、ここに来るようになりましてね。

一回来てみて気に入った後は他のところへは行って見ようとは思わなかったんですか？

ああ、それ以前までずっと外国に行っていましたんで、え～、タイだとか、え～、ベトナムだとかグアムとかサイパンだとか、いろいろ遊ぶだけだったらいろいろあったんですけども、後半になってくると、一応住む前提みたいなことを考えながら旅行していたので。

その住む前提っていうのがあったから、国内でもあったかいところということで特に沖縄という感じですか？

はい。それも沖縄でも、あんまり都会は嫌いなんですよ、わたしは。だから那覇は嫌いだから、東京とあんまりかわらない、人も多い、車も多い。その中で、離島の方でライフラインがしっかりしているところが最終的に石垣島なんですよ。あとはもう病院もないし、もちろんスーパーもコンビニもないし、そういう離島がぼこぼこありますけど、そこまで行く元気はないんです。

そうですね、石垣は特に離島の中でも利便性が高い…

そうですね。病院だとか、え～、交通の便だとか、物の便だとか、え～、ライフラインはしっかりしてますんでねここは。どこにも行くことなく。

もう離島っていうのを考えたときには他の離島のことは全く考えなかったんですか？

あとは遊びに行けばいいと思ってましたから、住む気はなかったですね。

離島の中では石垣島以外にも、宮古島とかが移住者の方には人気だと聞いたんですけども…

宮古島は観光で行かなかったから、あの～要は選択肢に入らなかったですね。

じゃあ、もう旅行で行ったっていうところでもう、離島で住むなら石垣というようになったんですね。

あんまり、あの～僕、考えるときにいろんなところへいろんな検索をしないんですよ。

ほとんど自分がよければもう次ぎのものは消してしまうんですね。だから、そういう性格も手伝って、決めることがすごく早いんですよ。

じゃあ、物事を決めるときには他を検索するのではなく、そのときのめぐり合わせで決めてしまうんですね。

そうですね。だからそのときいいところを、よりよくすることを考える性格なので、他のところは探さないです。迷いますから。

資料3-3 Cさん（吉原地区在住）

以前、インタビューさせていただいたときに沖縄本島の方へはよく行っていたとおっしゃってたと思うんですけども、それはお仕事か

何かで？

いや、プライベートです。

プライベート、旅行でということですね。

それはだいたい何年くらい前からのことなんですか？

15年くらい前ですね。

15年くらい前から旅行で沖縄へ行くようになったきっかけはどのような？

それはもう、蝶々の関係です。

本島の方にも蝶々の研究で行ってらっしゃったんですか？

はい。

それはもう本島にしかない蝶々とかっていうのがいるんですか？

本州にいない蝶が沖縄本島に

そのときはまだ石垣へはまだ行ってらっしゃらなかったんですか？

そうですね。旅費の関係もありましたね。本島は安い。頻繁に行ける、行けますよね。旅費の関係だけですね。

蝶の研究以外の、本当の観光目的でっていうのは？

それはしたことないです。

沖縄に行く前と行った後とで沖縄に対するイメージに差はできましたか？

…（数秒間）…それはあの～、蝶々が多いっていうイメージ。

もう、蝶々に関する観点でのイメージということですか？

ええ。

もう街は同じでもんね。都会とね。そこに魅力は全然感じてなかったですね。町並みの魅力はまったく感じてなかったですね。多少自然が残ってたので、そっちの面ではよかったですね。

わたしが他にインタビューさせてもらった方の中では、沖縄の自然に魅力を感じたとか独特の文化に興味を持ったというのをきっかけに沖縄へ来られた方が多かったんですが、そういう部分というのは意識はありましたか？

ないですね。

それは、無意識の中でそういった部分を前提にしていたということも？

…（数秒間沈黙）…ないですね。蝶がいるから来ただけです。

ただあの～、小さい頃から、あの～、沖縄とかの写真、蝶の写真集なんか見るにつれて、蝶のすばらしさだけでなく、風光明媚なところとか、そんな認識はもちろんありましたよね。だから、別に石垣島の、沖縄石垣の風光明媚を無視するんじゃなくて、それも舞台として、ステージ上にあるっていう前提ですけどもね。ただ、蝶が目的で来たわけであって、環境の中で蝶がいるなっていう。

あくまでも蝶がメインでっていうことですね。

だから、最近の沖縄ブームとかそれは一切関係ないです。

あと、本島の方へはずっと行かれてて、石垣の方へは6年前に初めて行かれたということだったと思うんですけども、6年前に石垣を訪れたときに好印象を持たれたということなんですけれども、その印象というのもやっぱり蝶に関しての印象が強かったんでしょうか？

まあ、そうですね。あの、印象というか直感的なものを感じたんですね。ちょっとうまく言い表せないけど。

その直感的なものっていうのは？

1つは沖縄本島以上に蝶が多かったっていう。だからもう日本一蝶が多いのと、あと、時間が止まったような空間っていうのを感じましたね。

以前にお話をうかがったときにも時間がゆっくり感じることに對しての癒しとかっていうのも感じられたっていうふうにおっしゃってたんですけども、それはもう訪れたときに、訪れたからこそ感じれた感覚なんですか？

そうですね。

6年前に石垣に来られる前までは、そういったことに対する期待は、石垣に対してイメージとして持っていたらっしゃったんでしょうか？
そういう石垣に癒しを求めるような期待というのは？

ないね、なかったですね。たぶん結構石垣は不勉強で来ましたから、自然のイメージとかほとんどなかったですね。

実際に石垣へ移住しようとなったときにインターネットで住むところとかをお探しになったというふうにかがったんですけども、

そのときインターネットで土地などを検索するのに具体的にはどういうところを中心にお調べになったんでしょうか？

あの～、…（数秒間沈黙）…、土地のことですか？

はい、あの～、石垣で具体的に住まいというか住むところを探すのに、例えば地元の不動産会社に聞いてみたりとか…

そういう意味では複数社ですね。雑誌からインターネットでアクセスできるところを検索しましたから。

じゃあ、現地の土地とかに関する情報を流している媒体に関してはもう、いろいろ？

そうですね。

わりとその頃から現地の不動産の会社っていうのは移住者を前提にしたような土地の売り出し方をしていたんですか？

始まってたんじゃないですかね、徐々にね。

例えば、どういった地域の土地を売り出しているのが多かったか、とかそういう場所的な偏りというのはありましたか？

いや、偏りはないですね。完璧なところでしたよ。

その街中の販売物件もあったし、ばらつきがありましたね。

あの、地元の人が買うのは、もう、街中しか買わない。島ですけども、地方に行こうなんていうのは思ってませんから、街中以外、団体以外のところ、販売するってことはもう、本土向けの販売しかないんですね。住む人は本土の人しかいないから。だから、そういう動きをもう石垣の不動産も何かしら動き出していたので、まあ、移住のどうこうっていうのはあったんでしょうね。そういう街中以外のところの部分っていうのは、景色がいいとかね。そんなPRコピーでしたよ。

そうするとそのころからわりと、街中以外の地域っていうのは本土からの移住者向けに…

開発が動き出していた。

そしてそれに対して不動産会社のほうも、そういうアピールの仕方を…

やりだしていた頃ですね。

では、そういうようなアピールを受けながら居住地を選んでいかれたってことで、まあ、当時はやっぱり、コストのこととか立地条件
ということを中心に探されていたということだったと思うんですけども、その立地条件というのは具体的には？？

あの、もともとこの博物館をつくるつもりでいましたから、ある程度観光客が訪れる、訪れやすい場所で道路のそばでせっかく移住するから多少は風光明媚なところ。

いくつかのパラメーターはありましたけどね。

その、例えば人が集まるっていう点だけを見てみたら、街中ってうのも結構人がきやすいように思うんですけども、候補としては挙がらなかったんですか？

候補もありましたよ、街中も。高いですね。

高いんですか？

価格、土地の価格が。もう今はこういうところもね、ぐ〜っと土地あがってきてしまいましたけれども、街中は当時は土地の価格が全然違う。

街中も含めていろんなところを候補地に挙げていたということで、今お住まいの吉原というか山原の地区以外に、もし覚えてらっしゃったら具体的に教えていただきたいんですが。

もう、市内も見ましたしね。市内でも見たんですよ、一応物件的な本。そっから全部見てましたよ。白保もあるし、伊原間もあるし、野底もあるし、あと今住んでるところとか、あるいは川平集落の中とかね。

わりと北部の方とかまで一応候補として…

あの〜インターネットで物件を50くらいピックアップしてたんですよ。で、リストがあがって、3泊4日に来て、3泊4日みんなその物件の確認の為にレンタカー借りてぐるぐるぐるぐる回ってらしたから。だから、価格もそうだし、いろいろこう考えたときにやっぱり●●にはなかなかならないけれど、50件の物件の中の一番落ち着くところがここだった。ですからどうしても、●●じゃないとダメだとか。価格もそうだし、いくつかあるなかで一番パフォーマンスにすぐれたのを選ぶ感じですね。

資料3-4 Dさん（吉原地区在住）

以前、インタビューさせていただいたときに沖縄へ移住する前に沖縄を訪れたときのことをお話頂いたと思うんですけども、友達のお姉さんが沖縄で教員をしていたのがきっかけだったということで、それをきっかけにして実際に行く前って沖縄に対して興味などはあったんですか？

あ〜、あのね〜、1回目は本当に興味なかったの。ただほんとにいるっていうだけで、沖縄ってどんどころっていうと、まあ、海がきれいなイメージしかなくて、特に何も興味がなくて、2回目、3回目と行って見て、まあ、沖縄本島初めて行って見て、まあ、米軍基地、アメリカと、まあ、おもしろいところだなと。2回目、3回目は自分でも、何ていうのかな、興味を持って、もっとこの辺見たいなとか。

沖縄本島だったら、やっぱり米軍に圧倒されたね、一番。米軍について自分なりに、僕も卒論が米軍だったの。

そうだったんですか？

だから、沖縄にすごい興味を持って、米軍基地に関する卒論を書いたのね。だから1回目はね、米軍にすごく、なんか、え〜っていうのを思って。

それからあと、小さい島々の文化だったり、町並みだったり、うん、そういうのに興味を持ちはじめはいたね。

じゃあ、実際に沖縄に行くまではそれほど沖縄を意識することはなかったんですね。

そうだね。そういうのはなかったね。

さきほど、海がきれいっていうイメージしかなかったとおっしゃってたんですけど、そういったイメージっていうのはどうやってついたイメージだと思いますか？まあ、たぶんそんなことは意識されたことはないと思うんですけど。

あ〜まあ〜そうだね〜、まあ、そんなこと意識したことはないよね。う〜ん。

それとあのときはね、今でも覚えているよ、JALのね、キャンペーンガールがね、森高千里だったのね、確か。あるでしょ、夏になったら、JALがキャンペーンをね。そのときに森高千里だったんだよ。あ、森高千里だ、青い海だみたい。それぐらいだね。

一回目以降、だんだん興味を持っていったということだったんですけども、具体的にはどういったところに興味を持つようになっていったんでしょうか？

まあ、そうだね〜、一番最初はほんと、米軍が印象的で、それからまあ、小さい、まあ、沖縄本島からも、でっかい島々がいろいろあって、そういうところ遊びに行って、まあ、自然の豊かさが一番ではあったんだろうね。今考えると、そのときは無我夢中で、なんていうかなあ、豪遊とかしかしてなく、でね〜、もう15年前のことだから、僕も何とも言えないんだけど、まあ、そういうものにすごく影響は持ったかな。

実際に沖縄のいろんな場所へ行って見て、その中で移住のことを考え始められたんですか？

え〜っとね〜、僕がじゅう…19のときでしょ、はじめて沖縄へ行ったのが。15年前か。

そうだね、3回目に行ったときは、意識したね。

その三回目で意識するようになったのは、何か特別なことがあったんでしょうか？

特別な理由ね…（数秒間沈黙）…そうだね〜…たぶん、やっぱりね、…（数秒間沈黙）…きつと気持ちよかったんだろうね〜、なんともいえないな〜、ほんと、海と山と、熱い太陽とね。まあ、本当、開放的だったというか、なんか、そうだね〜、そんなところかな〜。

そうすると、もう言葉で表しきれないような、感覚的な動機なんですね。

そうだね。なんかパワーが湧いてくるというかね、うん。

その、移住を考え始めたときに、もういきなり石垣っていうのはあったんですか？

あの〜、僕の場合は、何ていうか、ただ住むじゃなく、けっこうまあ、ビジネスをやろうと考えてたから、そういう意味で沖縄本島、石垣島、久米島とか離島とかも含めて、どこがビジネスチャンスがあるかなって思ったときに、石垣島だったね。

じゃあ、石垣以外のところだったらあえて自分が店を出さなくてもいいと判断したんですね。

そうだね、別に俺がやっても意味がないかな。おもしろくないなど。

石垣以外の離島とかは考えなかったんですか？

石垣以外の離島はね、…考えたけども、あの～、やっぱ生活をするうえで、まあ、すごく現実的な話だけでも、人口が少なすぎるね。あの～、観光客が入ってくる人数も少ない。

まあ、そういうことで、長期移住となると、小さい島っていうのは非常に難しいんじゃないかなと考えると、程よい大きさの石垣だったね。

生活の利便性という点で考えて石垣ということですね？

そうだね。

資料3-5 Eさん夫婦（吉原地区にて店経営、川平在住）

※ 夫婦で石垣島に移住してきたものの、夫婦間でそれぞれが持っている沖縄経験に大きな差があったので夫婦それぞれから話を聞いている。

〈夫〉

移住されたのが2、3年前ということなんですけれども、そのときのきっかけというのが、西表で雑貨屋を営んでいる知り合いのところを訪れて、そうした生活にあこがれを持ったということだったと思うんですけども、西表に知り合いを訪ねられたときにはもう移住のことはご夫婦で視野に入れていらっやっったんでしょうか？

…（10秒ほど沈黙）…

もしもし？

あ、はいはい、…全然、旅行で行ったので

じゃあ、そのときはほんとに遊びで、観光で行かれたということですか？

そうですね。

その観光で行く前に、夫婦でいずれはどこかへ移住しようかっていう話は？

いえ、特に。

こんなところで生活できたらいいなって冗談では話してましたけど、本気では別に考えてなかったです。

そうですね。それじゃあ、冗談で話してたところから、本当に移住するようになるまでで思うところの切り替えというか、気持ちの変化というのはどういうところで起こったと思いますか？

う～ん…どう…（数秒間沈黙）…まあ、徐々にというか、時間がたつにつれて、思いが強くなっていったんですね。

わたしが石垣で実際インタビューさせてもらった人で多かったのが、40代、50代過ぎるまで本土で生活して働いて蓄えをためて、そ

れから移住してきた人が多かったんですが、そういった方向性では考えられなかったんですか？もうすぐにもという…

そうですね。別に今やりたいことを後に取っとく必要もないし、行きたいと思ったらすぐ行動した方が、断然。

でも、生活環境とかもがらっと変わってしまう中で不安とかはなかったですか？

移住って考えると、あれですけど、たぶん東京とかでもみんな地方から来てると思うんですね。それと同じで、同じって思えば、別に同じ日本なので、特に心配することもないのかなあと思って。

移住前に観光で西表に行かれたということだったんですけれども、それ以前に沖縄へ行った経験は？

えっと、わたしはないです。うちのかみさんの方は行ったことあるんですけれども。

じゃあ、旦那さんにとっては最初の沖縄の経験というのは西表ということですね。

そうですね。

それまでは沖縄に対して、行ってみたいなあとかっていう興味などはあったんですか？

そうですね～、特に、やっぱり、東京からですと、あの～、飛行機代も高いですし、沖縄行くんだったらやっぱり、ハワイとかグアムとかいうほうが自分の中ではありましたね。

少し抽象的な話になるんですけれども、実際に西表に行く前に沖縄に対して持っていたイメージとかはどのようなものでしたか？

そうですね～、「南国」ぐらいしかなかったですね。「あったかいところ」っていうイメージだけです。

実際西表へ行ってそうしたイメージっていうのは何か変化はありましたか？

そうですね～、やっぱり、そんなに情報をもてなかったもので、あの～…そうですね～、まあいいところだなあって。いままでは沖縄っていうのは全く、例えば遊びに行くにしても、考えてなかったんですけれども、まあ、その、例えばハワイとかグアムとはまた違った新しさっていうか、楽しさっていうか、そういうのがあるところだなと思いましたね。

ちなみに、グアムとかハワイに行かれた経験は？

ないです。

でも、どちらかといえば沖縄というよりは海外の嗜好のほうが強かったということですよ。

そうですね。

〈妻〉

先ほど、旦那さんからもいろいろお話聞かせていただいたんですけれども、話を聞いていくと、移住前の沖縄に対しての経験が夫婦の間でずいぶん差があるようだったので、お話聞かせていただきたいんですけれども、よろしいでしょうか？

はい。そうですね、わたしはバイトしてたんで、なんか有志とかで住みこみのバイトとかして何ヶ月か住んでたんで。

そのバイトっていうのは、前にちらっと聞いたのではヘルパーのバイトで、西表にいらっしやったんですよね？

そうです。

それはもう最初から西表という感じで他には考えてなかったんですか？

本島に旅行に行こうと思って、最初沖縄に行くつもりだったのかな？

で、そのときに、カナダ人の女の子と知り合って、で、その子が石垣行くとって言ったのかな？あれ？石垣がいいよって、その辺で、旅の途中でどここの島がいいって話してて、石垣がいいってきいて、石垣に船で行って、石垣で知り合った人が西表がすごくいいよって言ってて、それで西表行ったらすごくよくて、それからずっとそっちで。

じゃあ、それから数ヶ月間ずっと西表で暮らしてたんですね。

そうですね。そこで友達になった人が後で、もう10年前かな？結婚してまたその人のところに遊びに。

西表に行く前に、一度石垣へは行ったことがあったんですね。

もちろん、石垣から船が出ているので。

そのときっていうのは沖縄の離島にいずれは移住したいとかっていう気持ちはあったんですか？

うん、そうね～、友達が移住とかしてたんで、まあ、行きたいなっていうふうには思ってたけど、みんな年がすごい上なんで、何かのプロになってから行ってみてるんですね。食べていけないから。わたしも自分で何かできるようになってから、そこで家買って暮らせたらなあ～って、まあ、たぶん思ってたかな。でも、現実的にすごい、けっこう、そんなことは考えたこともなかったかな。

一番最初に友達に石垣がいいって言われて行ったときっていうのはもう本当に観光目的で？

そうですね。仕事もやめて旅行行ってたんで、どこ行こうかなって、旅先で会う人がここいいよって言ってくれたところに。

それで行ってみたらよくなって…

西表がすごくよかったですよ。

例えば、具体的には西表のこういったところに魅力を感じられたんですか？

すごいね、西表って言うと自然です。

友達に紹介されて石垣とか西表に行かれたとは思いますが、実際行く前っていうのは沖縄に対してもとから興味はあったんですか？

別に、あの～、1人旅立ってたんで、泊るとこなくてこまるとか、あったかいところだったらそれはないかな～って。特に深い意味はな

いです。

先ほど西表の自然にすごく魅力を感じたとおっしゃってたんですけど、行く前はどんなイメージをもってたんですか？

いや、まったく。あの、別に都会から行った訳でもないんで、普通に自分が住むところにも自然はあるんで、生えてる木がちょっと違う、ジャングルだったんで。

石垣は、まあ、本土と比べると都会じゃないですけど、普通に信号とかあったんで、西表は信号もなくて。

たぶん風光明媚なところにすごく感動して、それは一番はまりましたね。

最近だと、沖縄ブームとかでテレビや雑誌などで取り上げられているので、そういうのを見て持った沖縄のイメージを持ってわたしの

場合だと石垣に行ったんですけど、そういったことは？

いいえ、まったく、そんなイメージは。

じゃあ、沖縄といえばこれっていうようなものは…

あったかいぐらい。

資料4 R社社員インタビュー内容

会社設立以降、移住希望者からの問い合わせや利用の件数が増え始めた時期はあるんですか？

ちょっとね～具体的な数字って言うのはなかなか出せないんですけどね。

あの～僕もこっちへ来て1(?)年半ちょっとぐらいなんですけど、直接的な問い合わせがいくらあるかっていうのはね、たまにありますけどね。たまに
って感じですよ。

そうなんですか？

だからまあ、本出してますから、その本、そういうのを読んで、そのうえでっていう場合が多いです。突然、その、移住したいんですよとかいって、あの
～ネットで調べたんですよとかってことはあんま、ぼくは少なくともとったことはないです。

本を出されているということですが、(R社でつくられている)移住者向けの雑誌はいつ頃から出版され始めたんですか？

やっぱりあの～、本格的なものっていうのは、「沖縄スタイル」が一番最初だと思うんですよ。だから、「沖縄スタイル」いつぐらいに出たのかなあ？まあ、
だから2、3年前。

もう、だからそれに特化した企画がね、そういう、もう、まるまるその一冊にクローズアップしたっていうのは「沖縄スタイル」がたぶん最初だと思う
んですよ。

その沖縄スタイルを出版する経緯としては沖縄の移住ブームが起こってから以降につくられはじめた雑誌なんですか？

そうですね、あの、まあ、確かに流れとしてはなんかそういうのみたいのがあったと思うんですけど、ただ、その～、何ていうんですかね、言ってみれば
その、知る人ぞ知るみたいじゃないですけど…う～ん、まあ、そんなにたくさん情報があったわけでもないし、で、まあ、テレビとかそういうマスコ
ミとかでちよろっと、まあ、何ページか書いてあることがね、記事が書いてある程度だったりとかする。でさ、より詳しい、あの、何て言うんですかね、
もっと詳しいようなその、丸まる一冊沖縄の、沖縄に関することについて書いてあるのが「沖縄スタイル」
で、あとなんでしたっけ？

他にも「沖縄に住む」とかいろいろ出されている雑誌とかは「沖縄スタイル」に続いて出したようなかたち(になるんでしょうか)？

そうですね。だからあとは結構そういうことですね。ほんとに後続ということになると思うんですよ。だからもう、ほんとに、「沖縄スタイル」が最初。

出版以外に実際に移住支援も行っているとうかがったんですが、具体的にはどういった支援が多いんですか？

事業内容としては、例えばその、アパート紹介したりとか、ケースバイケースなんですよ。

一定の何かそのやり方があってそれに従って動いてるっていうのではなくて、まあ、ご相談を受けたらそれに対してまあ、お答えする。

じゃあ、移住したいと考えてらっしゃる方ひとりひとりの場合とか条件に合わせて(ということなんですか?)。

そうですね。だから、まあ、その、そういうご相談になった場合に、そのご相談にのるというのがあって、で、まあ、できることをまあ、やっていく。

そのへ決まったやり方で、誰がやっても、その、どこそこ紹介してとかそういうことはないですね。

相談されるなかで、こういった相談が特に多いとかってというのは？

やっぱり、あの～、そうですね、やっぱり住まいとかね、仕事のこととかだと思んですけど。でも、住まいとかね、あの、不動産やさんとか他にもありますけれども、まあ、ちょっと難しいと思うから、よほど何か特殊な事情があればね、そっちもそれを探してるっていつてればね、お教えできるけれども、普通に実際なんかいろいろ探してるってぐらいであれば、それはもう、ご自分で探していただくほうがむしろかなってなるんで。積極的にそんなに仕事とかについてはご紹介したりはしないですね。自分で職安に行ってみつけていただく方が適性とかもありますからね。

住むところについての相談がけっこうあるということなんですか？

そうですね。どこの、どのへんに住んだらいいかっていうのが、まあ、間違いないですね。

あと、まあ、離島に住みたいですということが仮にあったとしても、結構難しいわけですよ。自然(?)とかいろいろ違いますからね。だから、そのへんも相談に乗りながら、どこかいいところあったら紹介する。

なにか物件などを紹介するってなればR社さん単独ではなくて、別の不動産会社とのれんけいになりますよね？

そうですね。

そのときに特定の提携を結んでいる不動産会社はあるんですか？

ああ、それはないですね。

ないんですか？

はい。

じゃあ、そのときそのときに応じていろんな不動産会社をまわって、ということですか？

そうですね。だからまあ、いろんなところに声をかけてみたりとか、具体的にこうしてほしいって要望があれば、あちこち声をかけて、特定のどこかの不動産屋さんに決めてるとかそういうことはないですね。で、まあ、不動産の雑誌を扱ってますから、まあ、不動産会社たくさん取り上げてるんです。それに直接、あの～、こんな条件なんでとるんちゃうという感じで相談することは結構多いかな。

移住先については具体的にどういった地域が今は好まれる傾向にあるんでしょうか。

好まれる傾向としてはね、離島とかね、田舎ぐらしがしたいっていう人が多いですね。

けど、まあ、離島とかだとね、病院とかもうなかったりする場合もあるし。

離島に住みたいんだけど、離島の中でも都会を求める人があったりするわけですよ。それは無理な話なんですよ。そういう人わりとけっこういるんですよ。…そういう人場合はそういう話をきいたら、ちょっと、こうこうで難しいですよっていいですよ。だから、年配の方なんか特に病院のこととか考えると、沖縄の南部、だから那覇とかそのへんの周辺とかは病院たくさんあるんですよ。だからまあ、何つうのかな、全くの都会へ住みたいなら南部。

じゃあ、おすすめしたりするということですか？

よくおすすめはしないけど、そういうところですよってことを伝えるんです。

特に若い人でとか、畑とかしたいとかやったらまあ、北部とか、中部・北部。

農地、土地とか自分で買って自分で耕したりとかして。

離島を希望されてきた方にも利便性の問題とか生活上の問題であまり離島ぐらしはおすすめせずに、本島のほうで…

おすすめせず、ていうか、覚悟してくださいねみたいな感じ。

それをちゃんと知った上で、行ってほしい。

離島へ移住したいと相談に来られる方は多いですか？

そうですね。そういう方はだいたい八重山とか宮古とかが多いですね。そこがまあ、メジャーっていうところもあるでしょうね。いきなり久米島とかが頭に上ってこないんですよ。だからまあ、結果的に石垣とか宮古は多いということになってるのかな。

好まれる移住先に変化はありますか？

そういう変化はまだ今のところ感じないですね。

参考文献

- 朝田良輝（2002）：「沖縄県石垣島における戦後開拓集落の変容過程と土地買占め」，大阪市立大学文学部修士論文
- 岩佐吉郎（2007）：「沖縄における観光業地域の発展」，地理 52 - 11, p 91～106
- ㈱おきぎん経済研究所（2007）：「賃料動向ネットワーク調査概要」
- (財)沖縄コンベンションビューロー（2004）：「沖縄観光マーケティング調査」
- 沖縄県（2006）：『観光要覧』
- 沖縄総合事務局総務部調査企画課（2006）：「県内移住者に関する基礎調査」
- 沖縄タイムス社（1998）：『庶民がつづる沖縄戦後生活史』
- ㈱海邦総研事業支援部（2007）：「転入・観光動向にみる沖縄への地域別吸引度」，㈱海邦総研
- 加藤千夏・菊本泰子・高橋直哉・藤村有加（2004）：「『ちゅらさん』における沖縄の表象・生産・受容」，岩渕功一・多田治・田仲康博編：『沖縄に立ちすくむ—大学を越えて深化する知』，せりか書房
- 総務省（2005）：『平成 17 年国勢調査報告』
- 多田治（2004）：『沖縄イメージの誕生—青い海のカルチュラル・スタディーズ』，東洋経済新報社
- 田仲康博（2002）：『メディアに表象される沖縄文化』せりか書房
- 野村浩也（2005）：『無意識の植民地主義—日本人の米軍基地と沖縄人』，御茶の水書房
- 日本銀行那覇支店（2006）：『移住者増加による沖縄県経済の影響について』

参考URL

- 大宅壮一文庫雑誌記事検索 web 版 <http://oya-bunko.com>
- 聞蔵Ⅱ <http://database.asahi.com>
- 日経テレコン 21 <http://telecom21.nikkei.co.jp>
- 八重山毎日オンライン <http://www.y-mainichi.co.jp>
- Webcat Plus <http://webcatplus-equal.nii.ac.jp>